

大悲を以て衆生を教化する還相廻向の利益である。斯く二利圓滿する所に小乗の涅槃に異なれる大乘の涅槃の特色がある。是身即は無爲法身。浄土論た七一法句者……謂、眞實智慧無爲法身故とあり、本來本有の法性身のことをいふ。無爲法身即畢竟平等身。論た六畢竟同得寂滅平等故とあり、平等身とは法性は平等である。その法性を證つた身ゆゑ平等身といふ、畢竟はその平等身はいつくまでも變らぬ常住なことをいふ。畢竟平等心即是寂滅。上の論文に據る。涅槃は諸有る煩惱を滅し諸の戲論を離れた空寂滅盡の境であるから寂滅といふ。寂滅即是實相。實相は諸法如實の相で、實智に照らされる如々の境の虚偽にあらざるをいふ。實相即是法性。その實相は諸法法爾の體性にして、人天等の作爲せるものにあざれば法性といふ。法性即是眞如。其法性は眞實不虛妄であると同時に如常不變であるから眞如といふ。眞如即是一如也。其眞如は唯一絶對にして、二三あるにあらざれば、之を一如といふと、浄土の證果たる滅度を次第に轉釋し、竟に一如へ結歸せられた。

## 二五 因 淨 果 淨

爾者若因若果……果亦淨也應知

【科文】 三總結 往還二廻向の中、往相廻向を明す中に、大行淨信の因あり、又證の果あり、今は是等往相の因果悉く顯はし了つて、こゝに行信證の三法總じて之を結釋するのである。

【句釋】 爾者若因若果 若因とは衆生往生の因にして、上に明せる大行淨信である。若果とは衆生往生の果にして、今の證である。前に信の下にて行も信も共に願心の廻向成就せる所なることを結釋したが、こゝでは更に前説の行信は往生の因である。往生の因が願心の廻向成就せる所なると共に往生の果も亦願心の廻向成就せる所である。斯くも既に因の行信が願心の廻向成就せる所で、其體が清淨であれば、その果たる證も亦清淨であると、こゝに往相の因果悉く之を願心莊嚴に結歸して、上に本願力廻向といへるに照應せしめられた。而して因淨故果亦淨也は、上に引ける論註下左三の文を斷取せられたのである。

【論攷】 問 佛教が宗教として眞理性を認むることは、因果の理法にありとせられて

ある。眞宗も亦佛教であるとすれば、眞宗の教義もまた此理法に準據せられねばならぬ。然るに他力廻向の救済は此必然の理法に背反するに似たり。如何に之を考ふべきか。

答 廣略二本に表現せられた宗祖の教義は、眞宗に於ける因果の理念を開顯せるものであつて、この因果の約束が本願の上に發見せられたところに、我眞宗が成立せるものと考へてよい。これ即ち前に非無因他、因有也と簡び、今また茲に若因果等と結釋せられた所以であると見られ得る。

問 然らば眞宗に於ける因果の理法如何。その因果の理法といふことは、何を以てかその教義の根據とするか。

答 前に既に言<sub>レ</sub>教者、則大無量壽經也とその據る所を掲げてゐる。斯の經の綱要は、上卷に廣く如來淨土の因果を説き、下卷に廣く衆生往生の因果を説くにあること、行卷末(會本三)所引の憬興疏の如くである。但し本經にあつては、如來淨土の因果を説ける其果中より衆生往生の因果を開出せるものなるに對して、教行信證に於けるその機構は、先づ衆生往生の因果を顯はせる其果中から、如來淨土の因果が開出せられてゐるといふ相異がある。されど廣略二本共に經宗を立て、其宗致と爲すところ如來

の本願を説くにありとなせるは、如來淨土の因果も衆生往生の因果も、悉く本願の上に約束されたものに外ならぬことを顯はせるものに外ならない。故に眞宗に於ける因果の教義は、大無量壽經の所説に根據を置き、本願によつて指示せられるものであると考へてよい。

問 本願に指示せられる因果とは、如何なる理念を以て其内容とするか。

答 佛教諸宗の教義は、孰れも因果を以て原則とするも、その理法の内容は決して一様でない。或は小乗諸部の因果説あり、或は法相三論等の如き三乗教の因果説あり、或は又華嚴天台の如き一乗教の因果説がある。然るに眞宗の因果説は、それが明かに祖釋の上に規定せられてゐないのであるから、必ずしも小乗の因果説や三乗の因果説を否定して、一乗の因果説であるとは斷言し得られない。若し是等は悉く聖道自力の因果説に外ならずと見れば、淨土他力の因果説は全く是等常途の因果説を超越して、別に其等の概念的因果の外に置かるゝ本質的なものであるとも見做し得られる。少くも因果俱に如來清淨願心の廻向し成就せられたものであるとすれば、その因果が如實に體驗せられることの外に、他力本願の救済といふことはないのである。これ即ち宗祖が本願圓頓一

乗と稱せるものであつて、これを一念往生といふ、一念は因であり往生は果である。行卷の終に他力の釋と一乗海の釋とを追加したまへる所以も恐らく亦此にあるのであつて、一乗を釋するに、果の一乗と因の一乗とを分ち、更に之を第一義乗たる絶對的な誓願一佛乘に結歸したまへる所以であると仰がせて頂く次第である。

問 前の信章終の總結では、非無因他因有也と否定的に顯されてゐる。今何が故ぞ證章の總結では、因淨故果亦淨也と肯定的に顯されたか。

答 因果同じく清淨願心の廻向成就せるところなれど、行信の因はなほ迷界の凡夫にあり、さればその因の成立を機の上に自ら把握し自ら肯定すべきでない。然るに證果は既に到彼岸の身にあつて、三有生死の雲晴れ、一如法界の眞身顯はるれば、因果悉く鏡を懸けた如く明了である。されば如來清淨願心の廻向成就せられる所と知らせて頂くことも、恐らく全面的には彼岸に到つて知られることであらう。そして還相廻向の利他教化といふことも、そこから現れるに相違ない。だから行信の因にあつては消極的にのみ言ひ顯はされるが、證果にあつてはそれが積極的に肯定せられるのであらうか。前後共に應知の二字を置かれたこと、留意せらるべきである。

## 二六 還相廻向

二言還相廻向者則利他教化地益也

【科文】 二明還相廻向三。初標章示體。上に本願力廻向として、往還二相を指標せられた中、既に廣く往相の内容として、行信證の因果を明し了つた。されば以下第二に還相廻向を明すのである。

【句釋】 二言還相廻向者 上の一言往相廻向者に對す。則利他教化地益也 論註に據れる語で、前段に利他教化地果とあるに同じ。果の五門の中第五の蘭林遊戯地門とあるが、即ちこの還相廻向の利益である。この利他の語を解するに、古來彌陀に約すると衆生に約するとの二説がある。これを上の行信證の章に利他圓滿利他深廣等といへる利他に準ずれば、この利他もまた彌陀の他力を顯はす語となり、往相は勿論、還相までが彌陀の廻向であることを示すこととなる。されど今此の還相は衆生の上に現れた利他である。往相が衆生の上に現れた自利であるとすれば、還相もまた衆生の機に現れた利他でなくてはならない。その衆生の上に現はれる行信證の自利に、利他圓滿と

か利他深廣とかいはれる場合は、それが如來の利他であり、利他の語を彌陀に約して解すべきは勿論であるが、今は全く證果の大用として衆生の身に現れる利他である。殊に利他教化地益とあつて、これが衆生の獲得する利益であるとすれば、此の還相の下の利他ばかりは、これを衆生に約して、普通の自利々他の利他として理解することが、妥當の見方である。

即是出於必至……還相廻向之願

【科文】 二示能出願

【句釋】 必至補處之願。補處とは佛處を補ふといふ意で、佛の候補者といふたやうなもの。娑婆の應身佛では、前佛入滅すれば、後佛その處を補ひ跡を繼ぐ、その後佛となつて跡目を繼ぐべき等覺の菩薩のことを補處の菩薩といふ。今二十二願では、我淨土に往生せんものには、必ず補處の位に至らしめんと願であるゆゑ、必至補處の願と名づく。是は諸師共許の願名である。亦名一生補處之願。等覺の菩薩は、僅に變易生死の最後の一生を残してゐる。此一生の盡きた時に、前佛の後を補ひ成佛するから之を具

には一生補處の菩薩と名づくる。然るに此の一生は、無有生死の一生というて、迷ひの生死の一生とは異ひ、生れるといふこともなければまた死ぬといふこともない。たゞ菩薩の因位を捨て、佛果のさとり身となることを一生と名づけたのである。所で娑婆の應身佛ならば、前佛入滅して後佛處を補ふことがあれど、淨土の本佛彌陀は無量壽であるとするれば、如何に佛位を繼ぐべきかといふに、それは十方佛土何れの世界へ至つても、佛入滅すれば其後を繼ぐべき資格があるといふのである。要するに一生補處とは菩薩の最高位を呼ぶ語で、娑婆出現の菩薩に寄せて、淨土往生の身も、下位の菩薩にあらず、その最高位に昇るといふことを現はせるものである。而も宗祖の所見では、一生補處とは、淨土の菩薩が從果向因の外相に過ぎず、内證は主伴同一の涅槃の證果であると思はれてゐる。而して上の必至補處は因に約する能至の立場から名づけ、此の一生補處は果に約する所至にあつて名づけたのである。亦可名還相廻向之願。前の二名は文に約して立つ。この一名は義に約して立つ。宗祖己證の願名である。論々註の指南に依れるもので、論註卷末の三願的證に、十八願を以て因の五門を的證し、十一願を以て果五門中前四門を的證し、二十二願を以て後の蘭林遊戲地の一門を的證せられた。二十二願に

は、一生補處と還相廻向との二の願事ある中、宗祖は前の往相の三願に對し、二十二願を還相の願として重視せられ、二廻向四願の組織を立てられたのである。

願成就文經言……度脫一切衆生已上

【科文】 三正明還相二。初引文。

【句釋】 願成就文經言。二十二の願成就文を引く。大經下卷東方の偈終つて、衆生往生の果を明す段の最初に出づ。彼國菩薩皆當究竟一生補處。諸師他流の意では、此菩薩を地前地上各階の菩薩と見て、是等の菩薩が孰れも最後には一生補處を仕おふすることと見る。今家にあつては、彼の國の菩薩を十方衆生の往生して同一證果に到れるものとなし、外相は悉く一生補處の最高位にありとする。それゆゑ究竟といふが即ち一生を過ぐれば成佛するといふことである。讚阿彌陀佛偈安樂無量摩訶薩、咸當一生補佛處とあるが同意に見られる。除其本願爲衆生故。上の三句は必至補處の願事、以下還相利他の願事成就である。其本願とは今は還相の菩薩の本願である。若し本に約すれば彌陀の本願とも見られる。以弘誓功德而自莊嚴。因願では弘誓を鎧に喩へて

願心の堅固なことを顯されてゐる。其の弘誓の功德で莊嚴し、生死罪濁の敵中に入り、自在に一切衆生を度せんとする利他の願心である。除の字の意につき、宗祖の所見では既に十一願に於いて往生せるもの皆悉く無上涅槃の妙果を證つてゐる。故に今は、その菩薩に衆生濟度の本願あつて、成佛することを望まないものは、一生補處の位にみながら、願の如く還相大悲の行を修せしめやうといふ意である。莊嚴經上九若有大願末欲成佛爲菩薩者我以威力令彼教化一切衆生皆發信心と説けると一致する。

聖言明知大慈大悲……悲引群生

【科文】 二結釋 還相廻向の下結嘆の御自釋である。

【句釋】 大慈大悲弘誓。第二十二願を讚嘆する語。佛の拔苦與樂の大慈大悲が、四十八願の中でも特に二十二願に現れてゐる。それは往生人を悉く一生補處に住せしめ、更に一切衆生を悉く救濟せしめんと利他教化を誓はれた本願だからである。故に證卷三六に還相廻向顯利他正意とある。廣大難思利益。この願の利益實に廣大難思である

といふ。讚に南無阿彌陀佛ノ廻向ノ恩徳廣大不思議ニテ云云とあるが、その意である。乃入煩惱稠林等 還相廻向て衆生を濟度する相を顯された。論た九生死園煩惱林中、論註下五廻入生死稠林に據つて造語せらる。稠林の林は衆多の義稠は難知の義で、煩惱の數多く而も稠密で知れ難いをいふ。普賢之徳は行普賢て大慈大悲の行のことをいふ。悲引は悲愍引導の義。論偈の利益諸群生の意である。

爾者若往若還……廻向成就也應知

【科文】 三總結往還 本願力廻向に往還の二種を開いて釋し來つたが、最後に往還二廻向の總結である。

【句釋】 若往若還 論註下五若往若還皆爲ノ拔ニ衆生ニ渡セ生死海ニ據る。如來清

淨願心等 論註下た三此三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所ナリ莊嚴ニ據る。

【論攷】 問 廣略二本いづれも往還二相を以て廻向の内容としてゐる。然るに由來宗義の研究上行信二法は、他力信心の意義として頗る重視せられてゐるが、その大綱たる往還二廻向については、比較的等閑に附せられてゐる如き觀がある。これは如何に考

へらるべきであらうか。

答 從來行信二法のみ重視せられたのは、他力の信心が多少相對的にのみ考察せられる傾向があつたからである。徳川時代の眞宗學が、西鎮二流や他の諸宗に對して、その對抗的意識に燃え、宗義の自ら相對化せられ消極的に理解せられやうとしたのは無理からぬ次第であつた。然るに行信二法にあつては眞假對立するけれど、往還二廻向にあつては、方便の二廻向はない、それゆゑ二廻向は眞宗の絶對面であつて、他力の救済が自利々他の菩薩道たるところに大乘佛敎としての積極的意味を有つ。されば現下の日本が躍進發展の狀勢にあつては、自ら往還二廻向の如き積極的救済の昂揚が要求せられるばかりでなく、行信二法の考察も、これを往相廻向の内容として、積極的に理解せらるべきである。宗祖が善導法然の宗義から、天親曇鸞の立場へと出て、廣略二本孰れも、往相廻向の中に行信二法を開出せることが、果して何の爲であるかを忘れてはならない。

問 還相廻向は涅槃の大用として、證果の中から開出せられる。されば全く彼岸に於ける利他敎化の益にして、斯土にあつては還相廻向の作用現れざるか。

答 願土ニイタレバスマシヤカニ無上涅槃ヲ證シテゾ、スナハチ大悲ヲオコスナリ、コ

レヲ廻向トナヅケタリとある。還相利他が滅度と共に彼土の益にして此土の益にあらざることは勿論である。此土に於ける行者の利他教化は、謂ゆる自信教人信であり、常行大悲の益であつて、因の五念門中第五の廻向門のことである。彼土に於ける還相の利他教化は、普賢の徳に歸して穢國に還來し人天を度するのであつて、これは果の五功德門中第五の蘭林遊戯地門のことである。二門偈でも、因の出門と果の出門とは明に區別せられ、果の出門には生彼土已<sup>リ</sup>速疾得<sup>ル</sup>云々と彼土のこととして讃頌せられてゐる。これを取り違へて、斯土に於ける行者自らの利他教化まで、これを直に還相廻向であるなぞと考へてはならない。これを取り違へたら忽ち一益法門に墮するであらう。さればこれを入出二門の自利々他で言へば、行者の自信教人信は、出門であり、利他ではあるけれど、これは往相廻向に屬して、還相廻向ではないのである。還相は出門であり利他ではあるが、これは往相ではないのである。行者が斯土に於ける自信教人信の利他は、己れ自ら淨土へ行きがけの利他であるから、利他は利他でも往相自利中の利他に外ならず、眞の利他廻向は彼土に於ける還相にあれば、還相<sup>ノ</sup>廻向<sup>ハ</sup>顯<sup>ニ</sup>利他正意<sup>ヲ</sup>（證卷）と言はれてゐる。

問 然らば往相は此土で廻向され、還相は彼土で廻向されるものと考ふべきか。

答 恐らくは然らず。往還二相は一具不離にして、同じく信の一念に南無阿彌陀佛の六字として廻向せられる。これ南無阿彌陀佛ノ廻向ノ恩徳廣大不思議ニテ云々と讃へられ、又往相還相ノ廻向ニマフアハヌ身トナリニセバ云々と示された所以であらう。他力一念の内容に、往還二種の廻向が具つてゐてこそ、眞宗が小乗佛教の羅漢道でなくして、二利圓滿せる大乘菩薩道たり得るのである。されば略本の行證の下に利他圓滿、信の下に利他深廣、更に還相の下に利他教化地の益たることを標し、最後に若<sup>ク</sup>往若<sup>ク</sup>還悉く如來清淨願心の廻向成就し給へる所に非るはなしと結べるもの、その意の存する所を酌むべきである。

問 斯くも還相が往相と同時に廻向されつゝ、而も彼土の益にして、全く此土の益にあらざとせば、還相利他は他力信心にとつて現實には何等の意味をも有たざるか。

答 此の義更に深く考ふべし。既に信の一念に往還二種ともに廻向せられたとすれば、往相廻向の行信の外に還相廻向といふことも何等かの意味を現實に有つには相異なる。試にそれを二つの方面から理解せしむる。先づ一つには何人の心にも利他の願念が

ある、その利他の願念があつても、この慈悲始終なく、末徹らぬ慈悲なれば、斯土では果されぬ。たゞ未來に還相といふ希望をもつことによつてのみ、それが現在にあつて其人の心に満足が獲られる。それは歎異鈔六父母孝養章に、ソノユヘハ一切ノ有情ハミナモテ世々生々ノ父母兄弟ナリ、イヅレモくコノ順次生ニ佛ニナリテタスケサフラフベキナリ……タゞ自力ヲステ、イソギ淨土ノサトリヲヒラキナバ、六道四生ノアヒダイヅレノ業苦ニシヅメリトモ神通方便ヲモテマヅ有縁ヲ度スベキナリト云云とあるので、宗祖自らの御心に、この還相廻向が如何な意味をもつてゐさせられたか、窺知せられる。これは還相を自己の得る利益として見たのであつて、恐らくこれが還相廻向としての現實に有つ本來の意義であらう。又二にはこれを更に他に屬して淨土の一教を興隆せる聖者や權化の方々を還相廻向の顯現として考へることも、宗義上必ずしも成立しないことはない。但し淨土から娑婆へ出現せる聖者權化の方々は、廣き意味で佛菩薩の化現であると考へられてゐる。それを孰れも悉く還相廻向の菩薩であると言うてしまふのは間違つてゐると嚴格に區別せられた學者もないではない。七高僧や師主知識の教化は、名號讃揚であるから、これを十七願から酬ひ現はれて下されたとも、仰がして頂かれるか

ら、寧ろそれは往相廻向とも言ひ得られる。それが果して還相廻向であるか否か。凡愚の智慧では知られない。されど如來の廻向を大判して、これを往還自利々他と分つ時には、利他の意味を擴大してこれを自己の還相ばかりでない、他の人々の還相にまで及ぼして考へるといふことは、寧ろそれが自然の考へ方ではあるまいか。それゆゑ大經の序分にあつても、彼の靈山の會座に列なれる聽衆の群には、小乗の羅漢あり、大乘の菩薩あり、在家の人々あり、然るにそれを皆遵普賢大士之徳云云と讃嘆された下では、悉く其内證は釋尊と徳を均しくする聖者である。而も其等の人々の二利の行徳を嘆ずる下では、遊諸佛國と供養諸佛と開化衆生とこの三の相を以てせること、全く二十二願に於ける還相廻向の相と一致してゐる。されば大經會座に列れる聖者は、極樂界中から出でた還相廻向の方々として其徳を仰ぐといふことは、既に本經の上に現れてゐて、先哲もこれを指摘せられたことであつた。(香月院大經講義四。易行院同錄三。二系等)。この略本でも次下に聖權の化益を明せるのも、是以の二字を近くこの還相廻向を承けたものと見、更に次に宗師顯示大悲往還廻向の言を聖權化益偏爲利一切凡愚に續かして見てゆけば、大經會座の聖衆のみならず、觀經の興教に活躍せる提婆阿闍世までが、還相廻



向の方として見られてゐたことが髣髴として述べられる。何にせよ往還二廻向は絶対的大悲表現であつて、これが本質は必ずしも自利々他と二つに切り離されるものでない。それゆゑ或はコレヲノ廻向ニヨリテコソ心行トモニエシムナレと讚へ、如來二種ノ廻向ヲ十方ニヒトシクヒロムベシと勧めさせられた。これは明かに還相廻向を自己の上のみ屬してはゐないやうである。されば御文六四に、ソノタノムコ、ロトイフハ、即是阿彌陀佛ノ衆生ヲ八萬四千ノ大光明ノナカニ攝取シテ、往還二種ノ廻向ヲ衆生ニアタヘマシマスコ、ロナリと解せるは、二廻向の絶対的な見方として、寧ろ其本義に迫れるものが看取せられる。

### 三 結 勸

#### 一 聖 權 素 懷

是以淨土緣熟……章提選安養

【科文】 三結勸三。初明教興所由三。初示大聖素懷二。初教興正爲。略本の第一總說段が三

つに分たれる中、以下第三の流通分結勸にして、觀經に依つて淨土眞宗の教興を論ずる所である。其中初に大聖の素懷が、未來世の惡機にあることを示される。

【句釋】 是。以。上。を。承。け。た。語。で、上。來。明。す。所。の。二。廻。向。四。法。悉。く。如。來。清。淨。願。心。の。廻。向。す。る。所。な。り。と。次。上。に。之。を。結。ん。で。あ。れ。ば、そ。れ。を。承。け。て、如。來。の。在。世。既。に。彌。陀。釋。迦。二。尊。が。方。便。し。て、こ。の。淨。土。眞。宗。の。教。を。興。さ。せ。ら。れ。た。即。ち。如。來。の。願。心。が。實。現。せ。ら。れ。て、往。相。還。相。の。廻。向。と。い。ふ。こ。と。が、實。際。に。地。上。の。宗。教。と。し。て。其。救。濟。力。を。發。動。し。た。と。い。ふ。こ。と。を。茲。に。開。顯。せ。ら。れ。た。も。の。と。窺。は。れ。る。淨。土。緣。熟。和。讚。に。淨。土。ノ。機。緣。熟。ス。レ。バ。と。あ。る。と。同。意。機。緣。と。は。所。被。の。機。が。緣。と。な。り。て、能。被。の。法。の。興。る。と。い。ふ。こ。と。調。達。闍。世。興。逆。害。提。婆。達。多（調。達。は。其。訛。語）や。阿。闍。世。王。が。大。逆。無。道。に。も。父。母。を。殺。害。せ。ん。と。す。る。逆。罪。を。造。る。所。が。淨。土。の。機。緣。の。潤。熟。し。た。所。で。あ。る。上。來。明。せ。る。二。廻。向。四。法。は。妙。藥。で。あ。る。妙。藥。の。効。驗。は。大。病人。を。待。つ。て。顯。る。大。經。の。法。の。眞。實。は、觀。經。の。機。の。眞。實。を。俟。ち。て。顯。る。の。で。あ。る。

濁。世。機。憫。五。濁。惡。世。の。機。を。佛。の。憫。み。た。ま。ふ。こ。と。釋。迦。章。提。選。安。養。釋。迦。が。章。提。を。し。て。光。臺。現。國。の。そ。の。中。に。別。し。て。選。ん。で。安。樂。世。界。を。願。生。せ。し。め。た。の。が、即。ち。章。提。が。末。代。凡。夫。の。總。名。代。と。な。つ。て、淨。土。門。の。こゝ。に。開。か。れ。た。と。こ。ろ。で。あ。る。と。い。ふ。廣。本首卷で。は。淨。業。機

彰<sup>レ</sup>とありて、淨業を修する機が茲に彰れたごととしてある。是れ當機に約す、略本は濁世機憫<sup>ミ</sup>とこれを未來世に約す。即ち爲未來世一切衆生にして、佛の本意は未來濁世の惡機にあることを彰はせるが略本である。

倩思<sup>レ</sup>彼靜念<sup>レ</sup>此……深顯素懷<sup>一</sup>

【科文】 二念<sup>ニ</sup>聖權素懷<sup>ニ</sup> 上に次いで大聖權化の仁慈の素懷深くこゝに思念せられることを示さる。

【句釋】 倩思<sup>〇</sup>彼靜念<sup>〇</sup>此 倩はツラく<sup>〇</sup>と訓む。言海に、古言、うつらく<sup>〇</sup>の略、(倩は猜の誤用か)、よくく、ねんごろに、つくく、念を入れて押し究めての意と解す。思<sup>レ</sup>彼念<sup>レ</sup>此 彼此の所指に就いて異說多し。或は曰く、彼とは觀經の會座を指し、此とは今日二廻向四法の章提の別選を指すと。或は曰く、彼とは觀經の會座を指し、此とは今日二廻向四法の弘通を指すと、其中後說採るべし。即ちよくく<sup>〇</sup>三千年前觀經の會座に章提が別して安樂世界を選べることを思ひ、又靜に末代濁世の今日斯くも眞宗教行の弘通せることを思へば、全く大聖の方便二尊の善巧であることが氣づかせられるといふ意味である。 達

多闍世博施<sup>〇</sup>仁慈<sup>〇</sup>、彌陀釋迦深顯素懷<sup>一</sup> 和讃の彌陀釋迦方便シテ等、大聖オノく<sup>〇</sup>モロトモニ等、二首の意で解すべし。達多や闍世が惡逆の標本となつて地獄へ墮ちる。そこが身を犠牲として仁慈を博く末代衆生に施すところであり、又章提が別選所求して安樂世界を選ぶ所は、彌陀因位に於ける選擇の素懷を顯はし、又釋迦此界に出世の本懷を顯された所であると、深く思念せられるといふこと。

## 二 他 利 利 他

依<sup>レ</sup>之論主宣布……逆惡闍提

【科文】 二明<sup>ニ</sup>傳統弘化<sup>ニ</sup> 上に眞宗の教典が、末代逆惡の機を救ふ大聖の本懷であることを顯はしたれば、此は其を承けて其佛在世に興つた法門を相承の祖たる天親曇鸞傳承して末代に弘通せられたことを明す一段である。

【句釋】 依<sup>〇</sup>之 上を承くる語で、已に釋尊在世に大聖權化は此眞宗を興せり、依<sup>レ</sup>之論主は云云と移る意である。 論主 淨土論の主天親菩薩のこと。 宣布<sup>〇</sup>廣大無碍淨信<sup>〇</sup> 廣大は威德廣大で威神功德の廣大無窮なこと。無碍は一多證文<sup>ヲ</sup>。無碍トマウスハ

煩惱惡業ニサヘラレズヤブラレヌヲイフナリと釋す。廣本三〇八では廣大無碍、一心とあれど、爰には上の信章に淨信とあるを承けて、廣大無碍、淨信と改められた。宣布は宣說流布である。普徧開化雜染堪忍群生。普徧は普共諸衆生の普と菩薩莊嚴四種の徧の字とを取る。雜染堪忍は稱讚淨土經た二の語を取り、娑婆世界のことをいふ。雜染は雜生染汚て有漏の雜業から生じて穢れてゐるといふ意。群生は利益諸群生の語を取る。以上要するに天親論主は三經に依つて一論を造り、本願の三信を合して一心とし、愚鈍の衆生に開示し化度せられたと、其恩德に感謝せられた。次に宗師顯示往還大悲廻向。宗師は總じては曇鸞以下の五祖、別しては曇鸞又は善導を指していふ。今は他力往生の義は一宗の要義なれば、其相承を尊び、特に曇鸞を宗師と呼ぶ。顯示往還大悲廻向といへるは、論では單に一心五念の因を修すれば五功德の果を得る旨が示されてゐる。この五因五果を往還の二相とし、而も大悲願力の廻向に由る旨を顯示せられたのは論註である。即ち註下五に論の廻向爲首得レ成就ス大悲心一故ニの論文を註して、廻向有二種、相一者、往相二者、還相云云とあるがそれである。愍レ勸レ弘レ宣レ他レ利レ々レ他レ深レ義ニ。愍勸は委曲の良て、丁寧親切のこと。弘宣は弘通し宣布すること。他利々他の深義

とは、もと利他と他利とは同義であつて、孰れも自利に對して利益他を意味する一體異名の語である。故に經論翻譯に於ける此語の使用例では、自利他利とも自利々他ともあつて、これが併用せられてゐる。然るに淨土論では、自利々他とあつて、自利他利と言うてゐない。鸞師それに着眼して論註下三答二曰レ論ニ言ヘリ修ニ五門行一以ニ自利々他成レ就ス故上、然ル覈ニ求ニ其本阿彌陀如來爲二增上緣、他利之與利他談有二左右、若シ自佛而言、宜言利他自衆生而言、宜言他利今將談佛力是故以利他言之當知此意也と、茲に他力廻向の深義を開顯せられた。聖權化益徧爲利一切凡愚。前段の觀經教興の因縁を結釋せらる。聖は彌陀釋迦の二尊、權は達多闍世韋提の三人を指す。徧をヒトへと訓めば上に屬し、徧の字と通用してアマネクと訓めば下に屬す。廣大心行唯欲引逆惡闍提。前に出せる論主と宗師との弘宣を結釋す。心行は論の一心五念、逆惡闍提は論の普共諸衆生を論註上卷末の釋に照らせば、逆惡闍提までも引接のためであることが知られる。

【論攷】 問 他利々他の深義といふ、何が故に之を深義といふか、その義相如何。

答 論註卷末の他利々他の釋は、宗師が往還二相共に大悲願力の廻向なることを顯示

せるものであつて、一家に於ける他力信心の本義こゝに淵源す、故に甚深の要義たること勿論である。

問 然らば論註に此の深義が如何に開顯せられたるか。

答 本論卷末に自利々他成就の相を明して應知菩薩如是修五門行自利々他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故と結ばれた。鸞師は此の利他の語に着目して、善男善女が修する五門の行に、如何にして自利々他と言ひ得るかと怪まれた。何となれば五念門の中、前四門は自利、第五廻向門が利他である。されど此の第五廻向門の利他は、願生の行者が自利の傍に修する廻向利益他の行であつて、速得成就菩提の因たるに價すべき利他としては餘りにそれが微劣である。如何にしてこれを利他と名づけたるかが問題となる。故に鸞師はこゝに論の利他とあるを他利といふ語と對照せしめ、他利之與利他談有左右、若自利佛而言宜言利他、自利衆生而言宜言他利、今將談佛力是故以利他言之當知此意也と、其深義を開顯せられた。即ちこれを他利と呼ぶべきに、利他の語で之を言うてあるところが、この利他たるや凡夫の利他ではない。全く如來の利他に外ならず、佛力他力を談ぜんが爲めであると、論意を深く探つて、こゝに本論に隠れたる他力廻向の深義を開顯せられたのである。

問 この他利と言はずして利他と言へる所に、佛力の顯れるといふことの意味は如何に理解せらるべきであらうか。

答 古來學者の解説異見紛々として多けれど、今は之を列擧するに遑がない。されど大體の見方が二に分れてゐる。一は單に彌陀と衆生とを對向せしめ、其間に他利と利他との語の左右を談じたものである。此の場合では、様々の解説や譬喩も設けられてゐるが、要するに他利と云へば他が利せられること、利他といへば他を利するといふことである。故に利他の方はわざ／＼、他人を利益することゆゑ利の字の力強し、他利の方は他が自然と利せられることゆゑ、利の字の働き弱し、それは亡國といふのと國亡といふのと其意味が異ふやうなものであると、單純にこれを語の上の左右として取扱ふた。この考へ方にも他利利他の語意の左右に他力の義が彰はれぬことはないけれど、それでは別に深義とまでは言はれぬ憾みがある。二には第五門の利他廻向といふことを、一應甲の衆生と他の乙丙等の衆生との間に行はれることと見て、甲には更に人を教へ導く力はない、利他の資格を缺いてゐる。然るに若し自づと他の乙丙等の人に感化を與へ信仰

に入らしめるやうな働きがあつたとすれば、自然に他が利せられたのであるゆゑ、それは自<sup>ニ</sup>利<sup>シテ</sup>衆生<sup>ニ</sup>而言<sup>ハ</sup>、宣<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>他<sup>レ</sup>利<sup>ト</sup>である。然るにそこへ第三者の佛力をもつて来て、その化他の力は全く己が力でなくて、其本を求むれば佛力他力である。佛力の現れに由るものと看做してこそ、それが利他と言はれるのであると、こゝが即ち若自佛而言<sup>ハ</sup>、宣<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>利他<sup>ト</sup>……今將<sup>ニ</sup>談<sup>ニ</sup>佛力<sup>一</sup>是故<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>利他<sup>一</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ト</sup>と宣へる所で、茲に三願的證して以<sup>テ</sup>斯<sup>ク</sup>而推<sup>ス</sup>他力<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>増上緣<sup>ト</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>然<sup>ラ</sup>と推驗せられた。この見方で他力廻向の深義が發揮せられることとなる。これは他力といふことを前の如く抽象的に考へず、具體的事實で見てゆく考へ方であつて、近來の先輩多く斯の義を用ひてゐる。御一代記聞書<sup>二</sup>に自信教人信ノ道理ナリト仰ラレル事と標して、尼入道ノタグヒノタウトヤアリガタヤト申サレ候ヲキ、テハ人ガ信ヲトルト前々住上人仰ラレ候由ニ候。何モシラネドモ佛ノ加備力ノ故ニ尼入道ナドノヨロコバル、ヲキ、テハ人ガ信ヲトルナリとあるは、全く此深義をよく味識せられた御詞と仰がれる。

### 三時衆勸誠

今庶道俗等大悲……而爲大炬

【科文】 二對三時衆勸誠<sup>二</sup>。初嘆益勸信<sup>一</sup>。初寄喻勸。こゝから愈々流通結勸の語となる。以下の科段知るべし。

【句釋】 今庶道俗等。今時御在世の道俗より滅後の人々(等の字)までも呼びかけて、吾祖の切なる悲懷を表はせる語。大悲願船。彌陀大悲の誓願を船に譬ふ。易行品に據る。清淨信心而爲順風。清淨の信心を順風に喩ふこと、論註上<sup>ニ</sup>不退風航に據る。易行の至極たる大悲願船ありとも、清淨信心の順風に恵まれねば、彼岸には到達せられない。無明闇夜功德寶珠而爲大炬。唯信文意<sup>三</sup>聖覺の語を引いて、誠<sup>ニ</sup>知<sup>シ</sup>無明長夜之大燈炬也云云とあり、無上寶珠の名號の功德が、能く大燈炬となつて、無明の闇夜を照らすと喩ふ。こゝに他力信行の大功德力を譬喩に寄せて顯はし、以て時衆に信を勧められたのである。

心昏識寡敬勉斯道惡重郭多深崇<sub>ニ</sub>斯<sub>レ</sub>信<sub>ヲ</sub>

【科文】 二約機勸

【句釋】 廣本總序にも類語出づ。元照彌陀經疏<sub>左</sub>識昏障厚信寡疑多<sub>キ</sub>等とあるに據る。心昏識寡心の昏昧にして是非邪正も辨へぬ愚昧なもの、識は知也て知識の乏しく寡きもの。斯道は本願一實の大道、末代凡夫の出離の道、この外になければ、斯道を勉めよと宣ふ。惡重は極惡深重、郭多は煩惱業苦の郭具足してゐるもの。斯信は上の清淨の大信心である。

噫弘誓強緣……………獲信心遠慶宿緣

【科文】 二舉難誠疑二。初示難勸

【句釋】 噫嘆辭。弘誓強緣玄義分の正<sub>レ</sub>託<sub>ニ</sub>佛願<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>作<sub>ニ</sub>強緣<sub>ト</sub>に據る。億劫<sub>叵</sub>獲大經序分の無量億劫難值難見等の文に據る。遇獲信心遠慶宿緣上を承けて、斯くも多生曠劫にも値ひ難き本願に値ひ、萬劫億劫にも獲難き信心を得たならば、遠く宿世の縁を慶べ、これぞ一世や二世の因縁ではない。久遠劫來、大悲の願力で我等に御

縁を結んで下された其強緣が今現れたのである程にと、宗祖自らの御喜びから人々へ御勸め下されたのである。

若也此廻覆蔽……………聞思莫遲慮

【科文】 二誠疑慮。更に時衆に對し、疑慮を誠めたまふ。

【句釋】 若也此廻。若しまた此度も疑ふたならばといふこと。也の字マタと訓むこと、古く詩の詞なぞに用ふ。覆蔽おほひかくす、網をかぶせたやうに。疑の心ほど心を昏く覆ひかくすものはない。更必逕歷曠劫多生更の字祖點カヘリテと訓む。此度また疑ふたならば、本の迷の古巢へ立ち歸りてといふ意。逕歷の逕の字經と通ず。觀經に經歷多劫とある經歷に同じ。攝取不捨之眞理とは彌陀の勅命、攝取して捨てぬとあるが、本願の喚聲であつて、大經所詮の眞實の理は、是より外にはない。超捷易往之教勅釋迦の發遣て、必得超絶去の文意を取る。教勅は言教佛勅である。聞思莫遲慮聞思は信卷本(會四<sub>左三七</sub>)所引の涅槃經に信復有<sub>ニ</sub>二種<sub>一</sub>一<sub>ニ</sub>從<sub>レ</sub>聞生<sub>ス</sub>二<sub>ニ</sub>從<sub>レ</sub>思生<sub>ス</sub>云云とあり、たゞ聞から生じて思より生ぜぬ信は、信不具足と名づく<sub>ト</sub>と説けば、今は聞思具

足して生ずる信のことをいふ。遅慮は遅退疑慮で、散善義に無疑無慮と出づ。今は二尊の教勅を深信して疑ふこと莫れと誡めたまふ。

#### 四 慶 嘆 述 意

慶哉愚禿仰惟……情難思法海

【科文】 三慶嘆述造意二、初慶所獲 最後に宗祖自ら自己領解の慶びを告白し、此略本撰述の意趣を述べらる。

【句釋】 慶哉 禮讚三慶哉難逢今得遇と出づ。 仰惟 玄義分三出づ。 樹心弘誓佛地流情難思法海 西域記三<sub>七</sub>樹心佛地流情法海とあり、今これに弘誓難思の語を加へて、眞宗の安心起行を示された。即ち樹心弘誓佛地とは一念歸命の信心を述べ、流情難思法海とは憶念稱名の報謝の相を述べたまふ。これを細釋すれば、樹心の心とは一心の佛因で、樹を大地へうゑたやうに、光明名號の因縁に催され、一心の佛因を深く彌陀弘誓の佛地へ樹立せしめたまふこと、これ一念發起の安心である。流情の情とは憶念の心のことであり、難思法海とは功德の法海みちみちて在ます名號のことである。

る。流とは憶念の心が縁に觸れ事に接して自ら流れ出でては稱名となることで、これが後念相續の相を顯はせる一句である。破邪顯正鈔上<sub>二</sub>親鸞聖人明師源空聖人ノオシヘヲウケラレシヨリコノカタ、ロ、ロヲ弘誓ノ佛地ニタテ、念ヲ難思ノ法海ニナガス、歸依ノコ、ロ他事ナク渴仰ノオモヒ餘念ナシ云云とあり、これを宗祖の信仰生活の相としてあられる。

嘆所聞慶所獲……特報廣大恩

【科文】 二結撰集意 上に自督の領解を述べ、こゝに正しく本鈔の造意を述べて結び止めさせられる。

【句釋】 嘆所聞慶所獲 この六字下に屬して造意を表はす。所聞とは黒谷門下に列り聞き難き本願名號の謂れを聞けるを嘆ず。所獲は三經七祖の經論釋を聞いて他力の信心を獲たことを慶ぶ。又所聞は聞其名號、所獲は信心歡喜であるとも見られる。採集眞言鈔出師釋 三經の眞言を採り集め七祖の釋文を鈔出してといふ。專念無上尊特報廣大恩 信と行との二句。無上尊は彌陀の別名、こゝにそれを出せるは、安樂集に

智論の文を引いて、佛は無上法王ナリ、菩薩は是レ法臣ナリ、所尊ヲ所重スル唯佛世尊ナリ是ノ故ニ應ニ當ニ常ニ念佛ニ也とある。これが知恩報恩の根據であるゆゑ、今も無上尊の名を出せるものと察せられる。特報廣大恩、常に無上尊を念じて、其廣大の恩を報ぜんが爲に、この略文類を撰集せられたとの意である。

以上略本として第一の總説の一段を終る。廣本六卷を總略して、其大要を鈔出せるは、これまでである。

### 第三 偈頌段の解説

#### 一 註論の引意

因茲披閱曇鸞……理宜先啓取要

【科文】 第二偈頌段分爲三。初述造偈意二。初引註論文。已下偈頌を出すに、先づ偈前の文である。上來四法を概説し畢つて、更に知恩報徳のため、眞宗の傳承について六十行の偈を造られた。それにつき先づ造偈の意を陳べて、茲に註論を引用せられる。

【句釋】 因茲。承上起下の辭であるが、承上は何を承けるかといふに、廣本偈前には是ヲ以爲ニ知恩報徳ノ披ニ宗師ノ釋ヲ云云とある。されば今も前の專ニ念ニ無上尊ニ特ニ報ニ廣大ノ恩ヲや遇ヲ獲ニ信心ニ遠ニ慶ニ宿縁ヲの文意を承けたものと見てよい。今偈頌を造ることは、名利勝他の爲にあらず、偏に信知佛恩深重の爲であるといふ意である。披閱曇鸞菩薩註論言。曇鸞を菩薩と稱するは梁國天子蕭王恒向ニ北禮ニ曇鸞菩薩ヲ（迦才の淨土論下ニ）より來る。隨ひて其著論註を崇敬して註論といふ。言とは鸞師の言を出されたま



て、言曰云を分ける時の例に同じからず。夫菩薩歸佛論註上三に論の建めに世尊とあるを解する中に出づ。孝子之歸父母一 智論十右一四菩薩常敬重ハム於佛一如三人敬重スルカ父母一とあるに據る。忠臣之歸君后一 智論七右五譬ハ如下大臣特蒙恩寵一常念スルカ其主上とあるに據る。君后は主君と后妃とである。動靜非己一 動いて事を作すも靜にして事を止めるも、我儘勝手をせぬこと。出沒必由一 出は外に出ること。沒は歸つて家にあること。由は所由で、出るも入るもその理由を告げること。知恩報德理宜一先啓一 忠臣孝子の心と同じく、菩薩も亦知恩報德の思ひからは、先づ佛に啓白せずにはゐられない。それゆゑ天親は論を造るに當つて、先づ世尊と呼び上げられたのであつた。今吾祖が正信偈を造らせられるのも、亦此の知恩報德の思ひより外にはないといふが、註論御引用の旨趣である。取要 肝要の所を取つて引くといふこと。

二 造意と偈題

信知佛恩深重作念佛正信偈曰

【科文】 二述意標題。正しく造偈の意趣を述べて、偈題を掲げ顯はした文である。

【句釋】 信知佛恩深重 智論七右五菩薩亦如是知恩重故常念佛とある。上

に引く論註に知恩報德とあるを承け、智論の知恩重一の語に信・佛・深の三字を添えて、造語せられた。即ち今六十行百二十句の偈頌を造るは外の爲ではない、全く彌陀の佛恩の深遠重大なるを信知して、知恩報德の思ひの外はないと、造偈の意志を表白せられた。作念佛正信偈曰 茲に偈題を標して念佛正信偈といふ。

【論攷】 問 然らば何の爲にか、こゝに偈頌といふ讃歌の形式に依られたのであるか。答 此に三意ありと見る。一には佛德を讃嘆せんが爲である。十地論一七諸讃嘆

者多一以二偈頌一と見えて、讃頌に詩歌の形式を用ひるのは世間普通である。二には遠く宿縁を慶ばんが爲である。これは上に遇獲信心一遠慶二宿縁一とあつて、上は彌陀釋迦二尊より下は七祖の傳統までを辿つて、悠遠な歴史を貫ける攝化といふことが思はれてこそ、そこに己が宿縁の遠く且つ久しきことが知られる。自分に信心の獲られたのは、昨日か今日のやうに思うてゐるけれど、宗祖自ら三願轉入の文の終に爰一久二入三願一海二深一知レ佛恩一と告白せられてゐるやうに、偶ま行信を獲る身となつたのは、久遠劫來の御導きに由るのである。されば今信知佛恩深重といふ中には、明知緣一二尊一大悲一獲一一心佛因一と彌陀釋迦二尊の大悲矜哀より、更に共に同心に歴史を貫いて無

邊の極濁惡を拯濟したまへる三國七祖の哀愍攝受までが悉く含まれてこそ、深重の佛恩を彌々深重と思ひ知らせて頂ける。即ち己が所獲所聞を慶嘆して、それが自ら偈頌の讃歌となつたのであるが、それは智論七五譬ハ如レ大臣特ニ蒙リ恩寵ヲ常ニ念ム佛ヲ其主上菩薩モ亦如レ是ノ、知リ種々ノ功德無量、智慧皆從リ佛得ル、知ル恩重ヲ故ニ常念ム佛ヲと言へるやうに、それらが悉く願力廻向であるといふことが、一つの尊い地上に於ける動きとして、此の偈頌の上に讃へ出されてゐるのである。三には時の道俗に信を勧める爲めであることは初の依經分二十二行は唯信釋迦如實言の一句で結ばれ、後の依釋分三十八行が唯可信斯高僧説の一句で結ばれてゐるので知られる。

問 念佛正信偈の題目如何に之を解すべきか。

答 初に之を離釋すれば、先づ念佛とは往相廻向の大行、眞實信心の稱名である。和讃に眞實信心ノ稱名ハ彌陀廻向ノ法ナレバ等、是れ今家の他力廻向の念佛の相である。他力廻向の信心が其儘口に現れて稱へる念佛である。仍て上の行を明す下にも稱名即憶念憶念即念佛とあつて、憶念稱名を念佛と名づくるが今家の相承である。この念佛、信心が所信となる時は、念佛則南無阿彌陀佛となるゆゑ、願成就の文に聞其名號信心歡喜

と示される(香月院の講辯に依る)。正信は六要の釋の如く、正ト者對レ傍ニ對レ邪ニ對レ雜ニの語、信とは疑に對するの語である。正直正當に信受することと見てよい。偈は具に偈陀、此に頌と翻ず。さて次に之を合釋すれば、念佛正信の四字につき、古來四つの見方を立つ。即ち(一)念佛即正信と見る持業釋の見方(二)念佛の正信と見る依主釋の見方、(三)念佛を有する正信と見る有財釋の見方(四)念佛と正信と二つに見る相違釋の見方、この四つの見方が分たれる。大體が念佛と正信とは行信の關係であつて、其關係を如何に規定するかといふことが宗義上重要な意味を持つ。然るに行信は本來往相廻向の内容として共に絶對的である。従ひて此の四の見方の孰れもが、これを念佛正信の四字に當て嵌めて理解せられ得るところに、行信の絶對的にして融通無礙なことが知られる。

問 廣本では正信念佛偈と題して、信前行後であり、略本は念佛正信偈と題して、行前信後である。何等か其意味に相異せるものあるか。

答 行卷では六要鈔(會三三八)に、就テ所行ノ法ニ舉テ能信ノ名ヲと釋し、念佛を正信するとは、念佛は所行ノ法ニあり、正信は能信ノ名ニありと、茲に正信念佛の四字に對し、其の關係に一つの規定を與へられた。これを行信に能所と分つ相對的の見方であるとすれ

ば、それが様々に意味づけられるであらうけれど、大體に於いて念佛を正信するとか、念佛の正信とか見てゆく依主釋の義がこれに當ると見られてゐる。これ廣本では正信偈が行信二卷の中間にあり、偈文によつて行信不離の關係が現されてゐると考へられるから、この見方で行信二卷の關係の規定せられることは、相對的の體制を主とせる廣本として必然的な見方である。されば略本の念佛正信といふも、これを念佛の正信と見れば、廣本の偈題と同じく依主釋の義の當て嵌めらるべきは勿論である。されど略本が斯く語を置き替へて、念佛正信とせられたには、そこに何等か別の意味がなくてよいであらうか。既に行中攝信といふその絶對的な立場が略本の特色であつてみれば、念佛正信とはこれを念佛即正信の持業釋にも見られぬことはあるまい。稱名即憶念憶念即念佛より言へば、念佛即正信正信即念佛であつて、茲に持業釋の義が當て嵌められる。されど念佛則是南無阿彌陀佛といふ立場より言はゞ、そこにまた所行能信といふ依主釋の義が成立するに相違ない。宗祖はこれに對し明かな規定を與へられないところに、寧ろ念佛正信の絶對性があるというてよい。

### 三 偈頌の文解 (略之)

## 第四 問答段の解説

### 一 合三爲一の趣旨

問念佛往生願已發三心論主何以故言一心

【科文】 第三問答段分爲三。初正問答一異三。初會經論三一二。初問。略本一部の構成が總說・偈頌・問答と三段に分るゝ中、以下第三の問答段である。其中初の三番の問答は、正問答一異の科に收め、論家宗師開等（一六）の下は、一心の佛因に結歸し、誠知大聖等（一七）からは卷末の總結釋である。而して三番の問答の中、今は初の經の三心と論の一心とを會釋する三一問答である。

【句釋】 問 解義の爲に且らく疑問を設く。念佛往生願 上の信章に出（一八）於念佛往生之願（一九）とあるを承け、十八願を指す。信卷（二〇）では、問如來、本願已發（二一）至心信樂欲生誓（二二）とある。これは上に至心信樂本願、文と標して願文を引いてあれば、それを直に問の語に擧げられた。然るに今略本では何が故に三心を論ずる所へ念佛往生の願名を出されたかといふに、これは十八願にあつて、信と行との不離を彰はせるものと見られ

る。至心信樂欲生と十方諸有を勧めるのは、念佛を廢せんが爲ではない。却つて如實の稱名を行ぜしめんが爲であることを知らせんため、此にも念佛往生の願名を出されたことと推せられる。末代無智の御文五も之と同意と考へてよい。已發三心一 三心は至心信樂欲生の三信である。然るに常には大經では三信といひ觀經では三心といふ。三心といへば自力他力に通ずれど、三信といへば他力に局することに決めてある。されど宗祖は唯信文意旨に大經ノ三信心ヲウルヲ一心ウルトハイフナリと宜ひ、顯の義では三心三信別なれど、隱の義では三心三信同一である。それゆゑ隱の義から信心同一に見て、こゝに本願の三信を三心と仰せられた。特に今爰で論の一心との同異を問答するには、三心一心と相對する方が便宜と思召して、心の字の方を用ひさせられたことと拜せられる。論主何以故言一心一 宗祖が天親に限り論主と稱せられるは論註下三論主建言三我一心一とあるに據らる。何以故等とは正しく疑問を出された語で、天親自ら與佛教相應と稱し、其大切な安心を陳べるのに、本願の上では三心と誓はれてゐるのに、何故に一心と言はれたのかと問難せられるのである。

【論攷】 問 偈文に次いで茲に問を出せること、餘りに唐突ではないか。何等かその生起に緣由ありや。

答 本文三段の構成に就いては、已に玄談に卑見を陳べておいた。此の問答段の由つて來る所以は、先づ論主の一心と本願の三心とを會合し、以て傳統の流源を闡明するにありと見るのである。即ち論に於ける我一心は、天親菩薩自督の詞である。曇鸞之を三不と開き、道綽更に三不三信の誨を慇懃にせられた。善導は觀經の三心を釋しつゝ、而も一心專念の義を明し、これを金剛心と名づく。源信法然亦其意を承けてゐる。されば論主が一心の自督は、三國の祖師を一貫せるばかりか、宗祖自らの領解も亦恐らくは此の一心の外に出でなかつたに相違ない。されば論主ノ一心トトケルヲバ、曇鸞大師ノミコトニハ、煩惱成就ノワレラガ他力ノ信トノベタマフと之を自己の一心とし、又は信心スナハチ一心ナリ、一心スナハチ金剛心云々と、此の一心を善導の金剛心と融會せられた。即ち論主の自督は即ち七祖の自督であり、七祖の自督は宗祖聖人自らの領解であつた。彼の愚禿釋鸞建仁辛酉曆棄テ雜行ヲ分歸ニ本願ニといへる宗祖入信の告白も、其内容は全く一心の自督に外ならない。されば論主の一心が果して本願の三心と合致するか否かは、宗祖にとつては生命已上の重要問題であつた。此の疑問に明證の出されぬ限

りは、宗祖に於ける眞宗の傳統は、本質的に成立しなかつたのである。されば前に行章の下に、龍樹の十住論と俱に天親の淨土論を引用したるも、其の淨土論に於ける我一心の詞は未だ解けざる謎として、その釋明を待つてゐたのである。されば茲に論主何ヲ以テ故言フヤ一心の問を提起せることは、決して唐突にはあらず、問はざるを得ざるものあつて、此の問が發せられたのである。

問 略本に於ける發問は、上段の所明を承けて其趣旨然るべしとせんも、此問答は元と廣本に出されてゐる。廣本に於いても發問の趣旨亦これと同一視すべきか。

答 廣略の二本この問答の安處を異にし、文段の起盡に相異があるけれど、前上の趣旨に至つては廣本も亦同一と視るべきである。何となれば信卷本卷に出せる二番の問答は、經の三心と論の一心との會合を主題とすれど、本願の三心を一信樂に結歸し、而も三心已疑蓋無雜故眞實一心是名金剛眞心金剛眞心是名眞實信心二六左とあつて、これを善導の金剛眞心と眞實信心とに結歸せられた。たゞ三一の會合だけが問答の目的ではない。而して末卷では先づ因願に於ける疑蓋無雜の信樂を願成就の一念と結びつけて、夫レ按ニ眞實信樂ヲ信樂ニ有リ一念ト提起し、而も言フ一念者信心無二心故曰フ

一念是名二心一心ハ則チ清淨報土眞因也二九右と、再び論主の一心へと會合せられた。而もそれを總結するに三心即一心一心即金剛心之義答ハ竟カ可知三〇右と、再び三心即一心から善導の金剛心へと立還つてゐる。惟ふに本願の三心は彌陀であり、成就の一念は釋尊であり、一心金剛心は天親と善導とである。これを信卷別序に照らせば、夫レ以テ獲得スルハ信樂ヲ發起ス自リ如來選擇願心は、彌陀の因願に於ける三心即一の信樂を顯はし、開闡スルハ眞心ヲ顯彰ス從テ大聖矜哀善巧ニは、釋迦の成就に於ける信心を彰はすに、善導の眞心を以てせられた。而も次には迷ニ定散ヲ自心昏ニ金剛眞信ニといひ、特ニ開ニ一心華文トといへるもの、それが後の問答段に於ける三心、信樂、一念、一心、金剛眞心の内面的な繋がりを表示せるものであると窺ひ得られる。それゆゑ此の廣略二本の問答をば、三一問答といへる名の下に、單に本願の三心と論主の一心との相異を解説したものであるとばかり考へることは、餘りにそれが無雜作な考へ方ではあるまいか。これは更に後の本文に至つて、問答の趣旨が詳解せられるであらうけれど、廣本に於ける問答も、其趣旨は此の略本に於いて其の隠れたる微意が打ち出されてゐることであつて、これを同一に考へてよいのである。

答愚鈍衆生覺知爲令易故論主合三爲一歟

【科文】 二答三。初略答。

【句釋】 愚鈍衆生。十八願に十方衆生とあれど、その正所被の機は愚痴鈍根の衆生にあることを示される。而して論主の一心は自行を申ぶるにあれど、普共諸衆生の論文を論註上右九に註して一切外凡夫人といひ、更に觀經下々品に照らして、之を下品凡夫のこととしてあれば、宗祖は今其意を明にして愚鈍衆生と標せられた。覺知爲令易故

論主若し三を合して一心とせられなくては愚鈍の劣機は到底三心の實義が覺知せられなといふ意。覺知の二字を廣本は解了に作る。覺は覺悟の義で解と同じく、知は了知で、其義解了と同じ。若し自督の自の字を流用すれば、覺知は即ち自覺自知である。また廣本では對機の愚鈍衆生を所爲とする外に、法の自爾に約して涅槃眞因唯以信心ニの義を加へてある。今はそれを下文に譲つて、唯論主の功を示して此一由のみを擧ぐ。論主合三爲一歟。本願に於ける三心を合せて一心とせられたのであらうかといふ意。合一は天下を合せて統一せるやうに、三心は其儘でありつゝ而もその一つになれることをいふか。論語に桓公九合天下一といひ、唐書に天下始合爲一レといへる如き合の字

は其意味である。歟の字は以諸の反。推量を表はし又断定し難き意を表はす文字である。かうもあらうかなどいふ意で合三爲一歟といふ。但しこゝは略答なれば容易く断定せざるも、後に明證を出して之を断定せられる。

## 二 三心の字訓釋

言三心者一者至心二者信樂三者欲生

【科文】 二廣説二。一標列三心。言三心者は牒標、一者等は列名である。以下廣く合三爲一の義を説明せんとして、先づ三心の名を列擧せられた。

【句釋】 一者至心等。願文には一者二者等の數へ詞はない。今三心を合せて一心となる相を釋せんとするので、先づ三心を一者二者等と數へあげて列名せられた。

【論攷】 問 廣本には此の標列三心の語句がない。直に私闕三心字訓等と下に接いてある。今略本は何が故に此標列の語句を加へたるか。

答 廣本は此問答を信卷に出し、而も十八因願の文が前に引用せられてゐる。それゆゑ標列をおかず、たゞ問の語に前を承けて如來本願已發至心信樂欲生誓云云とい

ふ。然るに略本は因願の文を引用せず、前の問に已發三心というても、その三心が何であるか知られないので、こゝに改めて其名を列せられたのである。

問 願文の三信は、至心信樂欲生我國と一連になつてゐるのに、何が故ぞ茲には一者二者等の數詞を加へたるか。

答 これを三つに數へて列名せるは、後に此の三心を合一して一心とせんが爲である。初めから一つにするのでなくて、本願では三心であるのを、論主が一心とせられた所由を明すのであると、殊更こゝに列名せるは、周到な意を用ひさせられた所である。

問 一者二者等と數へられてゐるのは、觀經に説かれた自力の三心のことではないか。何が故ぞ今大經の三心を列名するに、一者二者等の數詞を用ひたるか。

答 觀經に於ける顯の義で、一者二者と數へた意味を解すれば、それは自力の三心なるに由る。即ち定散諸機各別の自力の心で、三心を並べて發すから、一者二者等の數詞が置かれるといふ。然るに今は大經に於ける十八願の三心である。然るに宗祖がこゝに觀經の三心と同じ一者二者等の數詞を挾めるは頗る不審とせられる所である。されど今試に之を解せん、約法三心機受一心といはれる定義から見れば、一者二者と數へられ

るのが寧ろ當然である。何となれば本願の三心は佛邊に成就せられる約法三心であつて、至心は至心、信樂は信樂とそれが一つ、別々に成就せられてゐる。それは後の復釋に現れることであつて、そこに一者至心二者信樂等とこれを牒標せるより見れば、恐らくその張本として茲に一者二者と數へられたのであらうか。だから同じ一者二者と三心を數へてあつても、觀經に於けるそれとは全く其立場を異にする。

### 私以字訓闡論意合三應一

【科文】 二正釋二。初以字訓會三。初標意。以下正しく合三爲一の義を釋するに、初は字訓を以て之を會合し、後は廻向に約して之を會する。信卷では之を兩番の問答となせるを、本鈔では一連にせられた。今は初の字訓釋を出すにつき、先づ其意を標したのである。

【句釋】 私。私にひそかにと謙遜する意。以字訓。訓は訓詁で、字訓は文字の意義の註解をいふ。即ち古今の語の意味に通じて其義を明にするを訓詁といふ。闡論。闡の字口圭切音ケイ。少しく視る意、うかがふこと。管窺といふ如く所見の狭きをいふ。論の正意は容易に窺はれぬことなれど、今はそれを垣間見するといふ卑謙の

意。合三應一。字訓から推究すれば、三心を合せて一心とするのが當然だといふこと。

【論攷】 問 經論の用語を究めて其意味を推定するは、容易のことでない。然るに今宗祖は三心の意味を規定するに、字訓に據れること、其例あるか。

答 天台の文句、慈恩の玄贊等、字訓を以て經義を釋せること、其例少くはない。されど善導が散善義に至誠心を釋して、至者眞也誠者實也等と釋せるは、正しく此の字訓釋の祖述せられる釋例であると看做してよい。

問 至心といひ信樂といひ亦欲生といふ、孰れも原典梵語から意譯せられた譯語である。然るに今原語の意味に依らず、其譯語の字訓を以て、三信の意義を決定せんとするは、正鵠を失ふの虞なしとしないではないか。

答 既に翻譯せられた以上は、其譯語から語意の規定せられることは、他に方法のない限り、當然なことである。而も凡人の臆度に任せたのではない。權化の再誕たる祖師家の採られた方法は、絶対に認められねばならない。即ち字訓其物に現れた判断といふことは、宗祖の深き體驗から滲み出たものであつて、これらの文字によつてのみ内

面に於ける他力信心の風光に觸れることができるのである。だから此は世に謂ゆる訓詁學といふ如き常規を以て律せらるべきものでない。至心信樂欲生といふ語の如きも、單なる翻譯語ではなくて、宗祖にあつては、至心信樂欲生ト十方諸有ヲス、メテゾと不思議の誓願にあらはされた喚聲に外ならぬのであつた。銘文本をに、コノ至心信樂ハスナハチ十方ノ衆生ヲシテ、ワガ眞實ナル誓願ヲ信樂スベシト、ス、メタマヘル御チカヒノ至心信樂ナリ。凡夫自力ノコ、ロニハアラズ……タ、如來ノ至心信樂ヲフカクタノムベシとある釋意は、此の字訓を窺ふについて、先づ心から頂戴しておかるべきである。梵語とか譯語とかいふやうな考へから超えて、眞に絶対の妙處へと參到しなくては、斯うした宗祖の深刻な鑽仰記録も、徒らに空虛な概念遊戯と同視せられるであらう。

其意何者一者至心……生者成興也

【科文】 二徵釋二。初出字訓。

【句釋】 其意何者 徵起の辭である。一者至心 前に三名標列せるを此に先づ至心を牒擧す。語格は善導の三心釋に倣ふ。至者眞誠 至心に四訓ある中、先づ至の字に



眞誠の二訓を出す。信卷は實也を加へて三訓なれど今は之を略す。善導は至誠を訓して至者眞誠者實と釋す。宗祖これに據る。先づ至者眞の訓、字書にはない、義訓である。誠の至極は眞である、眞者精誠之至也(莊子漁父篇)とあつて、至の字に眞といはれる義があるゆゑ、これを眞と訓じたのである。次に誠の訓は、既に至の字に眞の義ありとすれば、眞は空虚でなくて實のあることだから、實の意味がある。その實には誠の訓がある。だから至の字を誠と訓ずるは轉訓である。これで眞の字の二訓が濟んだ。心者種實。玄義分三に言種者即是其心也とあり、種の字には因種の義がある。然るに菩提心は佛果の因種であるゆゑ、心の字に種の義が立つ。今至心の心の字にも種の意味があるといふ、これは義訓である。又その種には實がある。草木の果實が其儘に來年の種子である如く、實がなくては種子でない。故に心の字に實の訓ありといふは、種の訓から出た轉訓である。以上て至心の訓は濟んだが、至に眞誠の訓あり心に種實の訓あるは、要するに至心は眞實誠の心で、それは虛假不實でない、實のある因種であるとの意味である。二者信樂。牒舉、前の至心と同じ。信者眞實誠滿極成用重審驗。信樂に十五訓を施される中、先づ信の字の十訓を出す。信の字に眞の訓はな

いけれど、後の實の訓から來る轉訓である。實の訓は禮部韻に信誠信愨實也とあり、實のないことに信はない、此は本訓である。誠の訓は廣韻に、信息晋切忠信也……誠也とあり、其忠信とは眞實であると同時に、嘘偽りのないマコトゆゑ誠の訓あり、これは廣韻に出で、信の字の持つ意味ゆゑに本訓である。滿とは(カラ)でなく充ち満ちたことで、上の實の訓から出づれば轉訓である。極とは至極で、信ずるとは凡て道理の至極したところで信ずるから、信の字に極の訓がある。これは廣韻に出で、本訓である。成とは樂邦文類に誠者成也とある。上の誠の字に成也の訓があるので、極成の義で信を意味づけるためこゝに出す、これは轉訓である。用重の二訓は廣韻に出で、共に本訓である。用は信用すること、信じたのが即ちそれを用ひたことである。重は敬重の義で、信ずれば其人を敬ひ用ふることとなる。審とは廣韻に誠審也とあり、審思決定なぞ言うて、ハッキリと審にする所に信あり、これは上の誠の字から出づれば轉訓である。驗とは、廣韻に出づる信の五訓の一で本訓。これは證驗なぞと熟し、これに違ひないと自證するのが驗である。以上信の字の十訓を畢る。次に樂者欲願慶喜樂。これが樂の字の五訓である。欲願は玉篇に魚教切欲也とあつ

て、欲は樂の正訓。又玉篇の欲の字註に願也とあり、願の字註にも欲也と云へば、願は轉訓である。慶<sup>ナリ</sup>喜<sup>ナリ</sup>樂<sup>ナリ</sup>。三訓は樂をゲウと讀む時の訓ではない。ラクと讀む時にはたのしむの義となる。其時の訓が慶喜樂である。廣韻では樂の字の入聲に樂、喜樂也とあり、これ願成就に信心歡喜とある歡喜は、因願にあつては信樂の樂の字に當る、慶<sup>ナリ</sup>は次上の喜樂より轉出せるもので、東方偈に見慶得大慶とあり、又讚偈に出づる信心歡喜慶所聞の慶である。以上の三訓は、樂の同字訓である。三者欲<sup>ナリ</sup>生<sup>ナリ</sup>欲<sup>ナリ</sup>者<sup>ナリ</sup>願<sup>ナリ</sup>樂<sup>ナリ</sup>覺<sup>ナリ</sup>知<sup>ナリ</sup>生<sup>ナリ</sup>者<sup>ナリ</sup>成<sup>ナリ</sup>興<sup>ナリ</sup>也以下欲生について欲に四訓生に二訓、合せて六訓を設く。欲者願<sup>ナリ</sup>とは、上に引く玉篇に欲の字註に願也とあればこれは本訓。而も因願の欲生我國を成就には願生彼國と説いてあれば、願は欲の字の當分である。樂<sup>ナリ</sup>は轉訓、上に引く玉篇に樂、欲也とあれば、今は轉じて欲、樂也と釋す。覺<sup>ナリ</sup>知<sup>ナリ</sup>の二訓は轉訓である。廣韻に知、覺也欲也とあり、知の字に欲<sup>ナリ</sup>の訓あるからには、欲の字に知<sup>ナリ</sup>の訓ある筈。又廣韻に覺、知也とあり、今欲の字に覺<sup>ナリ</sup>の訓があつてみれば、自ら知<sup>ナリ</sup>の訓のあることも知られる。覺知とは即ち解了であつて、行者が起す欲生心には必ず往生一定の覺知がある。即ち釋の作<sup>ナリ</sup>得<sup>ナリ</sup>生<sup>ナリ</sup>想<sup>ナリ</sup>の義である。生<sup>ナリ</sup>者<sup>ナリ</sup>成<sup>ナリ</sup>生<sup>ナリ</sup>の字に成<sup>ナリ</sup>と訓ずるは義訓である。仁王經に諸法因成とあ

るを、良貴、疏に之を生成の義で釋す。諸法は自の因縁によつて生ず、而もそれは因縁が假に聚つて成ずるのであるゆゑ、生は成であるといふ。祖意亦恐らく此にあるか。興<sup>ナリ</sup>とは、信卷では此間に作也爲也の二訓を擧げて、次に興也の訓を出す、是れ廣韻に作、爲也生也とあり、而して興は禮部韻に作、興也とあり、興は作の轉訓である。生の字に成興の二訓を出せる意趣は、淨土の生は無生の生である。若し單に生起の生なれば、後に必ず壞滅を伴ふ。故に眞實報土の生は、往生即成佛であるから、生起の生にあらざ、生は生成の義にして、無生の生なることを彰はして、成<sup>ナリ</sup>と訓せらる。又興<sup>ナリ</sup>とは、報土往生の人の作佛することを得る所以は、彌陀因位に於ける若不生者の本願力から興起せることを彰はせることと窺はれる。

【論攷】 問 三心の字訓、如何に其趣旨を窺ふべきか。

答 六要鈔主すら字訓未<sup>ニ</sup>悉<sup>ク</sup>、勘得<sup>ル</sup>本文<sup>ニ</sup>博覽宏才可<sup>レ</sup>仰<sup>ス</sup>、可<sup>レ</sup>信<sup>ス</sup>と驚嘆し、謙退して註釋を下されなかつた。淺劣の未學到底素意を測量すべきでない。たゞ先哲其の研鑽に努めたれば、今は其説に任せて一應の解説を下せるのみである。而して是等字訓の典據もこれが考査は容易でない。但し宗祖が與へられた字訓の方式に就いては、本訓、義訓、

轉訓、同音訓、同字訓の類別が認められる。本訓とは字書に載せられた字訓であつて正訓とも稱せらる。義訓とは字書に據らず、殊に宗義から下せる思想的訓詁である。轉訓とは字書に於ける字訓を轉た互に照らして、其意の繋がれ所から訓釋せるものである。同音訓とは、字音の同じきより其義を借り來つて意を彰はせる方法をいひ、同字訓とは、文字の同じきより、別の音義をも用ひて其意を彰はせるをいふ。是等五種の方式は、宗祖の與へられた本鈔三信の二十五訓にそれ〴〵配當せられ得ること前に示せる如くである。

問 斯く字訓の使用に五類の方式あることは、全く宗祖自由の意巧に出づるものと見るべきか、そこに何等かの軌範ありと考ふべきか。

答 勿論無軌道の字訓配列であらう筈はない。而してその軌範といふことも、それが單に字典の示す音義に依つてのみ註解を與へるならば、それは全く世上訓詁の學に過ぎない。然るに今宗祖が是等字訓の文字に對しては、一々に透徹せる批判が與へられ、他力の信相として内面的な或る繋がれの下に、それ〴〵の字訓が按配されてゐる。若もそれが單に字典に於ける文字の有つ訓義のみに拘はつて註釋を加へたならば、それは腐

儒の業たる概念的な訓詁に過ぎない。今は單に文字に於ける語學的傳統の繋がりにてはない。全く宗祖自ら體驗したまへる他力信心の内容として、これらの文字のそれ〴〵に有つ意味が、内面的に繋がれた法味愛樂の位置にそれ〴〵と見出されたからであるに相違ない。古來學者が此の問答に於ける三信の字訓釋は、機の解了に約して合三爲一の相を顯はせるものと看做せることだが、この見解は永く尊重せらるべきである。私に言はずれば、論主の合三爲一が、愚鈍の衆生に覺知し易からしめん爲であつたとすれば、宗祖の字訓釋は、更に其合三爲一の體驗的内容を是等文字の上に浮き上らして、これを一層に覺知し易からしめんが爲に、末代愚鈍の衆生に惠施せられたものでなくてはならない。然れば則ち是等三心の字訓は、其様式として殆ど訓詁學者が、その研究の手段とする如き學的方法であつて、恐らくこれも宗祖の時代にあつては、吾祖自らの獨創のものとして見るべきではあるが、その獨創は單なる學的方法には止らない。寧ろそれが他力信相の内面的な體系として、これら訓詁の文字がそれ〴〵に繋がれた意味を有つといふ點において、それが宗教的に偉大な創作としての價值を持つ。私共もまた飽くまで機の解了として、字訓釋を讚仰したのである。

## 三 字訓の會合釋

爾者至心即是誠種眞實……如斯可思擇之

【科文】 二正會釋。上に字訓を出せるは、三心即一の旨を彰はさんが爲であつた。されば爰で前の字訓を會合し、三心孰れもこれを無有疑心に結歸せしめて、三心は要するに無有疑心に外ならざれば、即ち一心であると會合せられる。

【句釋】 爾者 上の字訓を受けていふ。至心即是誠種眞實之心 上に至と心とに四訓を出す、それを前後錯綜して誠種眞實之心といへるは、至心の當體即ち眞實の心であつて、虚偽不實でない。而も眞實は無上涅槃の誠の因種であるとするのであつたのである。故無有疑心 これは上の眞實心を消極的に言ひ詮はせるもので、往生禮讚に乃至一念無有疑心とあるに據る。宗祖は至心の眞實を法に約して釋するを例とすれど、今こゝでは合三爲一の旨を明すため、一心の内容として溶け込む至心を明すのであるゆゑ、之を機に約して眞實心なるが故に無有疑心であると釋せられた。即ち行者の機に受けた至心とは、如來の眞實心が到り届いた心に外ならねば、無有疑心と彌陀に歸する思

ひの二心ない心であると示されたのである。信樂即是眞實誠滿之心 已下信樂の信の字に十訓、樂の字に五訓、合して十五訓あるを分つて四句とせられた。其中第一句の眞實誠滿之心とは、これを上の至心と同じくこれを眞實心とせられた。即ち眞實にして虚偽ならず充實した心で、やはり一心に彌陀に歸して疑ひのない心である。極成用重之心 いかにもそうぢやと極成し信用し敬重する心で、やはり疑晴れて信ずる信樂の相である。欲願審驗之心 欲願は樂の字訓で、淨土往生を願ふ心。審驗は信の字訓で、明かに間違ないと疑の晴れたところ、その往生に疑晴れた心こそ、往生したいの欲願である。慶喜樂之心 疑の晴れた心は、コヨヒハ身ニモアマリヌルカナで、手の舞ひ足の蹈む所を知らぬ慶喜樂である。故無有疑心 上の四句を結びて、どの字訓から見ても信樂は疑心のないことであると、信樂の機受の相に歸せられた。欲生即是願樂之心 欲生即是願樂之心 欲の字の四訓生の字の二訓、之を錯綜して二句とした。其意應知故三心皆共眞實而無疑心 上の二十五訓から推せば、至心も眞實の心、信樂も眞實の心、欲生も亦眞實の心である。眞實と無疑とは表裏の別あれど一體兩面に外ならず、故に三心共に眞實なれば即ち是れ無疑心であると言はれる。無疑心故三心即一心

こが正しく合三爲一の會釋である。一心とは彌陀に歸する心の二心ないこと。二心とは即ち疑の心である。今三心孰れも無疑の心であつてみれば、それは二心のないことで、その二心のないところが即ち一心であるといはねばならない。故に本願の三心は即ち論主の一心であると合三爲一の義を成立せられた。

字訓如斯可思擇之

【科文】 三結字訓釋 字訓釋に標釋結と分れる中の第三の結である。

【句釋】 字訓如是 上來の字訓を總結せる語 可思擇之 思は思惟分別擇は簡擇で、心の内に能々分別して領解批判せよと勧められた。即ち三心即一心といふことは、安心として肝要なことであるから、字訓の上から味うて、無疑の一心の内容が其儘に三心であることを覺知せよとのことである。

【論攷】 問 此の字訓釋に下された二十五訓は、之を約法釋と見るべきか。之を約機釋と見るべきか。

答 昔から之を行者受得の能信の一心に具する三信の相として解し來つたことである。されば此の二十五訓は之を機に約して解すべきである。

問 已に前の會釋に、三心皆共眞實ニシテ而無ニ疑心ニ、無ニ疑心ニ故ニ三心即チ一心ナリとあれば、三心即一たるは無疑心なるに由る。無疑心は如何にも機の上のことである。されど三心共眞實といふを如何にして機に約して見るべきか。

答 二十五訓は要するに三心共に眞實なるを成ぜんが爲であつた。然るに三心皆共に眞實なるが故に、三心皆共に無疑心である。眞實と無疑とは一法の兩面に外ならざれば、無疑心を約機の釋意と見れば、三心皆共眞實も亦約機の釋意と見られるであらう。他力信心にあつては機法本より一體であるから、眞實を以て約機の眞實と見るも、決して約法の眞實と離れたものではない。最要鈔左一に、コノ信心ヲバマコトノコ、ロトヨムウヘハ凡夫ノ迷心ニアラズ、マタク佛心ナリとあるは、眞實の約法釋であり、コノ佛心ヲ凡夫ニサツケタマフトキ信心トイハル、ナリは、眞實の約機釋であると見てよい。約法釋とは全然機から離れて法の方にあるものを法として釋するならば約法とは言はれぬ。凡夫にさづけられた信心を佛心として釋するから約法釋である。されば今の字訓釋も亦是等の字訓を以て愚鈍の衆生に覺知し易からしめん爲に、合三爲一したまへる論意を窺ふにあれば、之を行者受得の安心たる一心の内容として見らるべく、無疑心に從へ

て三心皆共眞實といふも、一應は之を機に約して解すべきである。

問 六要會本四<sup>一</sup>凡心更<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>眞實之義偏<sup>ニ</sup>歸<sup>ス</sup>他力<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>佛德ヲ</sup>證得<sup>ス</sup>往生<sup>ニ</sup>是故<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>義<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>信相<sup>ヲ</sup>といふ。若も機に於いて三信の眞實相を論ぜば、これは定散諸機所發の三信ではなきか。

答 茲に六要鈔主が不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>信相<sup>ヲ</sup>と言へるは、恐らく彼の他流に於いて、横の三心豎の三心を立て、或は横に或は豎に三心の相を並べ起して、發三種心となせるを簡ばれたのであらう。斯く己が心内に三信の相を陳ねて、眞實の義を索めんとすれば、凡夫自力の企てたること言ふまでもない。今は然らず、他力一心の内容として、それが三心に於ける眞實を字訓の上で窺ふのである。謂は、信後に於ける法味愛樂とも見るべきで、一心所具の體驗内容として、これを無有疑心の上に味ふのである。喩へば三杯酸といへば酒と酸と醬油との調味液であるが、これを酒は酒屋の藏でできた、醬油は醬油の會社でできた、各々その製造元でいふは三心の約法釋である。行者の心に三心を發起するは一つづゝ之を別に發すのではない、一口に三杯酸を何かにかけてうまいなど飲み込むやうなものである。されど後からそれを味うてみれば、酒も酸も醬油もそれぐゝに味があるといふ如きであらう。今もそれと同じで、信後相續にあつて斯く字訓によつて三信の一々が眞實であり、その内容が疑ふに疑はれぬ眞實として成就せられてゐることが翫味せられてこそ、愈々他力の一心が金剛堅固に心々相續せられるのである。一念發起の極速では、三信の相を一つづゝ味うてはゐられない、そこが一心として授けられるところであつて、その一念には必ずしも三信の相を論じない。

#### 四 約法釋の大意

復言<sup>ニ</sup>三心<sup>者</sup>

【科文】 二約<sup>ニ</sup>廻向<sup>會</sup>。初別釋<sup>ニ</sup>三心<sup>ニ</sup>。初標。三心の字訓釋終りて、已下更に重ねて法の廻向に約して別々に三心を釋す。今はその復釋に就いての標である。

【句釋】 復言<sup>ニ</sup>三心<sup>者</sup> 廣本信卷では、此の三一問答が前後二番の問答とせられ、此復釋の下が、又問<sup>フ</sup>如<sup>ク</sup>字訓<sup>ノ</sup>論主<sup>ノ</sup>意以<sup>テ</sup>三<sup>爲</sup>一<sup>ト</sup>義其<sup>理</sup>雖<sup>可</sup>然<sup>ル</sup>、爲<sup>ニ</sup>愚惡<sup>ノ</sup>衆生<sup>ノ</sup>阿彌陀如來已<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup>三心<sup>願</sup>、云何<sup>ガ</sup>思念<sup>セ</sup>也。答、佛意難<sup>レ</sup>測<sup>リ</sup>云云と、前と同じく問答を設けてゐる。今略本ではたゞ復釋の體で斯く標せられてゐるが、其意は同じである。

【論攷】 問 上に已に字訓釋を以て三一の相異を會してある。何が故ぞ茲に重ねて三心を釋せるか。

答 廣本に准ずれば、已下は第二問答の意である。されば問答に前後二番あり、初の問答は經を以て論を難するのてあつて、已に本願に三心とあるのに論主は何故に一心と云ふかとの間に對し、愚鈍の衆生に覺知し易からしめんが爲に、三を合して一となせるものかと答へ、それより字訓について合三爲一の趣を明證せられた。後の問答は問者更に疑難を轉じて、前とは反對に論を以て經を難し、若し論に一心と云へるが愚鈍の衆生の爲めなりとすれば、本願に三心と誓へるは彌陀如來が愚鈍の衆生に覺知し難からしめんが爲めといふことになるではないかと、今度は論主の一心を以て本願の三心を難じたのである。即ち前の問答は機に約して三を一となせる所以を明かにして、天親の論意を釋顯せるものであると見るべく、後の問答は法に約して一を三とする所以を説いて、彌陀の願意を開顯せるものと見られ得る。

問 廣本では前後二番の問答となせるに、何等の理由あつてか略本では後の問答を改めて復釋となせるか。

答 已に先輩は、信卷後の問答を、初の問答から派生せるものと見てゐる。されば後の問答は法に約せる釋ではあれど、これは機中の法と見るべきであると言はれてある。それゆゑ信卷前後の二問答は、一は約機であり一は約法であると對立すべきでない。寧ろ後の問答は前の問答に従屬すべきであるから、其の微意を開顯せんが爲に、後の問答を改めて復釋の形式とせられたものであらう。

問 然らば信卷で復釋とし、略本で後を問答體としてもよいではないか。何が故ぞ爾せざるや。

答 廣本は教相を判ずる相對の書であり、略本は安心を要とする絶對の書である。されば廣本では後の問答に重きを置いて、本願の三信と十九二十兩願の三信とを相對せしめ、約法の開顯に力を注いでゐる。之に反して略本は約機の安心を主要とし、その絶對性を開顯する爲の約法釋であるから、これを前の問答に従屬せしめて、復釋の形式を取れるものであらう。故に同じく彌陀の願意を開顯せるとしても、それは絶對的の立場からである。

## 五 至心の約法釋

一者至心斯心即是……以名號爲至心體

【科文】 二釋三。初釋至心六。初出體。上の標に隨ひ、已下に三心を法に約して釋する中、先づ至心の出體釋である。

【句釋】 一者至心。上の標列の言を再び牒し、所釋の心を標す。斯心即是如來至德圓修滿足眞實之心。これは至心の相である。至德は至極の功德で、彌陀果上の萬徳のこと。之を選擇集本<sup>六七</sup>四智三身十力四無畏等一切内證功德、相好光明說法利生等一切外用功德、皆悉攝在阿彌陀佛名號之中<sup>二</sup>と釋すれど、實は無盡無量の功德である。故に信卷<sup>三四</sup>には不可思議不可稱不可說至德と言うてゐる。圓修滿足は其如來の至德は因位に於いて圓かに缺目なく修行せられたので、成就し滿足せられた果上の御徳であるといふこと。眞實之心。果上の萬徳を擧げて、この至德圓滿せるところが至心の眞實心たる所以であると、眞實功德相の上から至心を顯はされた。されば此眞實の心とは銘文本<sup>一</sup>至心ハ眞實トマフスナリ。眞實トマフスハ如來ノ御チカヒノ眞實ナルヲ至心トマ

フスナリ。煩惱具足ノ衆生ハモトヨリ眞實ノ心ナシ清淨ノ心ナシの御釋の如く、法の方の眞實心であつて、機の上の眞實心ではないと心得べきである。阿彌陀如來以眞實功德廻施一切。これは至心の用である。前に出せる彌陀果上の至德たる眞實の功德を、具足衆行令諸衆生功德成就と、一切衆生に廻施せられるのが、即ち至心である。即以名號爲至心體。これは至心の出體である。此の下至心の相から用、用から體を顯はせる語勢である。一多證文<sup>三〇</sup>に、眞實功德トマウスハ名號ナリとあつて、眞實功德を施されるといふことは、其體をいへば名號に外ならず、如來の不可稱不可說不可思議の功德を悉く名號に封じ込めて、本願信ずる一念に悉くそれをお與へ下されることである。

【論攷】 問 然らば眞實は法の方のみにあつて、衆生の方には無しとすべきか。

答 眞實は唯如來の方にあると見るが約法の場合である。信卷會四<sup>三四</sup>至心釋の終に、涅槃經に依れる言眞實者即是如來、如來者即是眞實の引文が出されてゐるが、即ちその意である。然らば其眞實は行者の機には渡らぬかといへば、信卷會四<sup>三四</sup>所引の散善義至誠心釋に、凡所施爲<sup>レ</sup>趣求<sup>ヲ</sup>亦皆眞實とある。これ行者の方に眞實はな

いけれど、如來の眞實を行者の胸の裏に施したまひ、能施の佛心が眞實であるゆゑ、所



施の衆生の信心も亦眞實であると、こゝに機の方に眞實が認められてゐる。これ即ち不簡内外明闇皆須眞實故名至誠心(會四三)と釋したまへる所以であつて、愚禿鈔下二には此至誠心釋に於ける前後二文を引き合せて、これを利他眞實を明せるものと指示されてある。この眞實の領解といふことの外に、無有疑心の信心の成立し得る道理はない。これを和讃に、無上寶珠ノ名號ト眞實信心ヒトツニテと讃へ、法の眞實の其儘が機の眞實たるところに、他力の他力たる所以があると言うてよい。然十方衆生穢惡……無眞實心

【科文】 二所由。如來から何故に廻施せられねばならぬかといふ所由を釋する。

【句釋】 然十方衆生 十八願の三信を釋する下なれば、十方衆生の對機を出す。穢惡汚染無清淨心 虛假雜毒無眞實心 散善義至誠心釋の語に據つて、衆生の機の方に至心なき相を示す。如何な宗教も其救濟には必ず清淨と眞實とが要求せられる。穢惡汚染や虛假雜毒の心で救はれるといふ宗教は一つもあるまい。特に大乘佛教で菩提の佛果を求むるには純粹な無漏清淨と、窮極な眞實至誠とが必須の條件である。然るに我等衆生の現實は、穢惡汚染であり虚假雜毒である。全く此の條件が缺けてゐる。これ即ち如來

の悲心已むなく至心を成就し廻向せられるに至つた所由である。されば自己の機に清淨眞實の遮情せられたところ、そこに如來の法の上に清淨眞實が顯彰せられるのである。是以如來因中行菩薩行……清淨眞實心

【科文】 三因行。因位の修行の至心なるを示す。

【句釋】 是以 上の衆生に清淨眞實なきを承けて、それが爲に法藏菩薩が云々と下を起す語。如來因中 彌陀如來その因位法藏菩薩たりし間に。行菩薩行時三業所修次に引かれた大經勝行段の意で、菩薩行とはこれを三業所修と言ひ、三業二利の行である。乃至一念一刹那 乃至は永劫の長時に對し、從多向少の語であつて、一念一刹那の短時までもといふ意。一念はたつた一思ひ、その一念を九十分したが一刹那であるといふ。共に心法に寄せて時の短いことを顯はす語である。無有非清淨眞實心 至心の下で眞實の外に清淨まで出せるは、經文に不生欲覺瞋覺等は清淨心ならざるなしの相であり、又無有虚偽諂曲之心等は眞實心ならざるなしの相である。如來以清淨眞心廻向諸有衆生

【科文】 四廻向。正しく果上の廻向に結す。

【句釋】以清淨真心。如來は其因位に圓修せる清淨眞實の心を以て、果上の名號に攝め、これを衆生に廻施せられといふことが、即ち至心の本願として持つ意味である。廻向諸有衆生。前には因願に依つて十方衆生といひ、今は成就に依つて諸有衆生で結ぶ。以て廻向の果上成就の名號であることを彰はし、且つ成就の文の至心廻向の語に裏づけられた釋意なることを示す。

經言不生欲覺……衆生功德成就抄出

【科文】五引證。至心の法藏因中所修なることを證明する爲に、大經の文を引く。

【句釋】經言。大經勝行段の言。不生欲覺瞋覺害覺。此に覺とは新譯佛典に尋と譯せられる語で、妄想分別することを覺といふ。覺悟とか覺知とかいふ覺とは異ひ、思覺の義で、思ひ廻らして貪瞋等の妄念を起すこと。不起欲想瞋想害想。想は取像の義で、凡て對境の寫象をして三覺を起す因となるのが、此の三想である。不著色聲香味觸法。色等の六境に染着しない。これら六塵の外境は緣となつて三想を起し、其三想から復三覺を起す。爲に凡夫は穢惡汚染にして清淨の心が無い。法藏因位に是等の覺想染着を離脱せられてあるゆゑ、無有非清淨心と前を成立する證文である。忍力成就

不計衆苦。忍辱の行で、寒熱飢渴凡て堪へ忍ぶ行なれば之を安受苦忍ともいふ。少欲知足無染恚癡。三毒煩惱を離れたこととて、少欲知足は其中無貪である。三昧常寂智惠無碍。禪定と智慧との具足せること。これら悉く一念一刹那も清淨ならざることなしの相である。無有虛偽諂曲之心。已下は眞實心の相を説ける經文で、一念一刹那も眞實ならざるなしの相である。先づ虚偽諂曲の心なきは意業の眞實なる相。和顏身業の眞實なる相。愛語先意承問。口業の眞實なる相である。勇猛精進志願無倦專求清白之法。六度中の精進波羅蜜の相。以惠利群生。已上眞實の三業に萬行を圓修するは、偏に利他の爲であることを示す語である。これ宗祖が廻向心を以て至心を釋し給ふ根據と見られ得る。恭敬三寶。三寶は福田にして諸福これを恭敬するより生ずれば、福莊嚴の本である。奉事師長。智慧は師長より生ずれば、これに奉事するは智莊嚴の本である。以大莊嚴具足衆行。福智の二莊嚴を以て、萬行を圓修し具足せること。即ち萬行は六度に歸し、六度の中、前五は福莊嚴、後一は智莊嚴であるゆゑ、六度は福智の二莊嚴に歸す。故に福智の二で莊嚴せるは、即ち衆善萬行を具足することとなる。令諸衆生功德成就。因位永劫に積功累徳せるは、それを果上の名號に攝めて、聞

き得る信の一念に、衆生の方に功德成就せしめんが爲であると、上來の所説を大悲廻向の心に結歸せられた。

【論攷】 問 經説引證の趣旨果して孰れにあると見るべきか。

答 全體に之を見れば、其因中に法藏菩薩の圓修せる三業二利の行をば悉く六字の果號に攝めて、これを衆生に廻向せられることを顯はすに外ならない。この三業二利の行とは即ち淨土論の五念門であつて、宗祖は二門偈に行者所修の五念の行を其儘に法藏所修の五念の行とせられたのも、全く此の經説の趣旨に依られたものと見られる。宗義に於ける絶對的の立場といふことも、その根據は恐らく茲に置かれてあるものと看做してよい。

問 然らば至心の證文として、此の經説は如何なる意味を有するか。

答 此の經説を部分的に見れば、初の不生欲覺瞋覺……不計衆苦の一段は、前の如來因中に於ける三業所修の無有非清淨心を證明し、次の無有虚偽諂曲……以惠利群生の一段は、前の如來因中三業所修の無有非眞實心を證明し、更に其次の恭敬三寶……令諸衆生功德成就の一段は、前の結語に如來以清淨眞心廻向諸有衆生と

あるを證明せるものと見るべきである。されば衆生の機の現實では穢惡汚染であり虚假雜毒であつて、清淨心も眞實心も全く否定せられるけれど、名號六字として廻施せられる眞實功德では、清淨心も眞實心も絶對的に肯定せられるのである。これ即ち名號を以て至心の體とせられる所以である。

問 本願の上に至心信樂欲生の三信と誓はれたのは、先づ衆生よ至心の心になれと十方諸有に勧められたのではないか。何が故ぞ衆生の眞實心に非ずして如來の眞實心なりと言ふか。

答 如何に清淨眞實の心になれよと言はれても、到底清淨眞實の心になれぬのが十方衆生の現實である。それを飽くまで徹視せる如來が、衆生に是非至心の心を發せと仰せられるは名號の一法に既に至心が成就せられてあるからである。そこに眞實大悲の廻向心があるといふことは、次の結釋に現れてゐる。

聖言明知今斯心……故無有疑心

【科文】 六結釋。至心の下を結ばせられる私釋である。

【句釋】 聖言明知 大聖の金言で明に知られる。

今斯心是如來清淨廣大至心 凡夫

の穢れた狭小な至心ではない、如來の廣大絶對な清淨眞實の心であるといふ。是名眞實心。眞實心は即ち至心である。至心即是大悲心。如來の眞實といへば外の心でない。たゞ衆生を助け救はんとの大悲心である。衆生に清淨眞實の心なくて、而も清淨眞實たらしめんとし、自ら清淨眞實ならんとして、徒に身心を苦勵し、急走急作頭燃を炙ふが如くなるのが、一般の宗教である。而もそこに救はれぬ惱みがある。それを他處に見てゐられぬところに、大悲の願心があるのである。故に至心は即ち是れ大悲心である。故無有疑心。その佛の眞實大悲が衆生の心に届き現れたところが、疑晴れて彌陀に歸する一念のたのみ心である。

### 六 信樂の約法釋

二者信樂即是眞實心爲信樂體。

【科文】 二釋信樂六。初出體。科意前に例して知れ。

【句釋】 即是。前に標せる信樂を押へて即是といふ。以眞實心。眞實心とは上の至心である。前段の終に至心、是名眞實心とあれば、茲にそれを承けて眞實心といふ。

爲信樂體。名號が至心の體であり、至心が信樂の體であるといふ。法にあつても三心其體一なればこそ、論主が三を合して一となし、それが機に現れて一心となる。されば信樂の體が何であるかといへば、別に體が一つあるのではなくて、上の至心に外ならぬのである。然らば何故に至心が信樂の體であるかといへば、この信樂は凡夫自力の心ではない。全く如來の大悲眞實心から廻向せられた心であるゆゑ、至心の外に信樂の體はないと言はれるのである。然具縛群萌穢濁……此必不可也

【科文】 二所由。

【句釋】 然具縛群萌穢濁凡愚。信樂が如來の方に成就し廻向せられる所由を顯はす爲に、茲に先づ對機を擧ぐ。無清淨信心無眞實信心。信心に清淨と眞實との二つを重ねた對句。信樂には至心が離れざれば、上の至心の下の清淨眞實を此に出せるものと見てよい。是故眞實功德難值清淨信樂難叵獲得。眞實功德は至心なれば、法に約して難値といひ、清淨信樂は信樂にて、機に約して難叵獲得といふ。依之闡釋意等。已下散善義の語に依つて、凡情不成の相を詳説す。文は知るべし。如灸頭燃の灸は救

の字と同音相通、頭髮に火のついたのを拂ひ落す如く、物を急にすする相を喩ふ。  
何以故正由下ルカ……故疑蓋無雜

【科文】 三因行。

【句釋】 何以故。次上の此必不可也を徴す。正由彼如來等。不可なる所以を答ふ。其意は彌陀の報土は如來が衆生に代つて菩薩の行を行じ、三業の所修悉く眞實心中に作したまへるに由つて感得せられた所である。故に虚假雜毒の善にては生れ難く、自力の心行にても到り難しと、上を成ずると同時に、其様に如來の方に一念一刹那も眞實ならざることなく、衆生の爲に信樂を成就し廻向せらるれば、疑蓋無雜であると、下を成ずるのである。

【論攷】 問 此に疑蓋無雜とあるは、如來の心で言ふか、衆生の心で言ふか。

答 こゝは如來の心の疑蓋無雜である。普通に疑蓋無雜といへば衆生の機の方で言ふけれど、今こゝでは彌陀が衆生に代つて疑蓋無雜の信樂を成就せることを明す下であるから、これを如來の法の方に屬すべきである。即ち彌陀の眞實決了の願心には少しも疑の雜らぬことである。初發心の時から決定必定無上正覺と、己が淨土の因果と衆生往生

の因果とに對し、秋毫の疑心もなければ、猶豫の思ひもない。されば信卷二四四には、三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜と明に如來の御心の疑蓋無雜としてある。

問 前の至心の下では、至心即是大悲心故無有疑心と結釋してある。この至心に於ける無有疑心も亦如來の方の法に屬すべきか。

答 この復釋の下は、三心の約法釋である。信樂に於ける疑蓋無雜が已に如來に屬すれば、至心の無有疑心も亦如來に屬して見るべきことは勿論である。次下の三心結釋に、三心皆是大悲廻向心故清淨眞實疑蓋無雜と、これを如來の願心に約してあるのを見ても其義更に明瞭である。

問 然らば前の字訓釋に無有疑心とあるも、これを佛邊に屬すべきか。

答 然らず。前の問答は大體が約機釋である。故に無有疑心も之を衆生の機に置いて自督として見るべきである。前の場合では無有疑心といふも疑蓋無雜といふも、これを一心の信相として、機邊に於いて見るのがその本義である。

問 若し然らば何が故ぞ、復釋では之を佛邊に屬せしめたるか。

答 是れ即ち後の復釋を約法とするも、前の問答から派生せるものとして、これを機

中の法と見る所以であらうか。この問答の趣旨は之を要するに機受の一心は約法の三心の大悲廻向たることを顯はすにある。而も其一心とは信心二心なきことであつて、その解了は無有疑心の外にはない。これ即ち禮讚に乃至一念無有疑心と示し、信卷末四九七に經言聞者衆生聞佛願生起本末四九八無有疑心と釋せる所以である。されば無有疑心が機受一心の領解に於ける本義であるけれど、その一心の内容を單に無二心故とか心々相續レテ他相無レ間雜トとか解せられることが、動もすれば相對的のみ取扱はれやうとする。然るに今無有疑心や疑蓋無雜を佛邊の法の上まで高揚せることは、こゝに約法絶對から一轉して約機絶對へと躍出する立場が置かれてゐると看做してよい。されば信卷末卷では、信樂ニ有リ一念トと因願の信樂を成就の一念に會合し、更に一念に兩釋を下して、信心無ニ二心ト故ニ曰フ一念ト是ヲ名ス一心ト云クと、茲に論主の一心を成就の一念に會合して、これを絶對的の一心とせられてゐる。この一心即ち金剛心であり、大菩提心であつて、發起ニ往相ノ一心ト故ニ無レ生ト而當レ受ク生無趣ト而更ニ應レ到ル趣ト、已ニ六趣ト四生ノ因亡シ果滅ハ云クと、こゝに横超斷の義の強調せられるところ、即ち三一問答の所詮である。

如來以清淨眞實信樂廻向諸有衆生

【科文】 四廻向。正しく信樂の如來廻向を明す。

【句釋】 以清淨眞實信樂。諸有衆生は報土に往生すべき正因たる清淨眞實の信樂がないから、如來の方に清淨眞實の信樂を成就して、これを廻向せられる。清淨眞實は信樂が前の至心を體とすることを彰はすことと見られる。諸有衆生。成就の文で、こゝには諸有衆生が所廻向の對機たることを示される。

本願成就文經言諸有衆生聞其名號信心歡喜抄出

【科文】 五引證。信樂の證文に十八成就の前半を抄引す。

【句釋】 本願成就文。第十八願なれば單に本願といふ。成就は因願に對す。諸有衆生等。句釋は上の行章の下の如し。

【論攷】 問 茲に十八成就の前半を抄引せるは、何等の趣旨なるか。

答 前に如來の信樂を諸有衆生に廻向することを明してある。成就の經文は、其廻向が衆生の機に現はれた相である。即ち因願に於いて成就せられた信樂が、諸有衆生に廻向せられて、衆生の機に到り届いた相を説いたのが聞其名號信心歡喜の語である。語を

換へて言へば、佛邊の三信を機に受けた相が此に彰されてゐるゆゑ、特に之を三信即一の信樂の下に引證せられたのであらう。

問 信卷の信樂釋では、今と同じく成就の文を引證するに、乃至一念の句まで抄出してゐる。而も末卷に一念の語を釋して、これを他力信心の標準とせられた。これ願成就に眞宗安心の至極を置く所以である。然るに略本では何の所以あつてか乃至一念の要語を略せるか。略本が安心爲要の書なりと言はゞ、この一念の要語ばかりは、之を書き洩らすべき筈がないではないか。

答 之に對する先哲の所見は、茲に之を評するの暇がない。試に予の卑見を開陳すれば、こゝに成就の一念は、相對の一念にあらずして、絕對の一念であることを知らしめたのである。信卷にあつて本卷に出せる三一問答では、その信樂たるや未だ十九二十の三信に對する相對的の信樂たるを免れない。されば末卷に至つて其卷首に夫レ按ニ眞實信樂ヲ信樂ニ有リ一念云々と、此に因願に於ける相對的の信樂が、成就に由つて絕對化されたのである。されば廣本の信樂釋では、今と同じく成就の文を抄出するに、そこに乃至一念の語を置いて、末卷に於ける信樂ニ有リ一念といふ絕對化の張本とせられなく

てはならない。故に信卷の信樂釋では、乃至一念の語が出されてゐる。然るに略本では絕對の安心を顯はすにあれば、此に乃至一念を出すには及ばない。何となれば、成就の乃至一念は絕對の一念であるゆゑ、たゞ信樂の下にのみ引かるべきではない。信樂も欲生もまた至心も、絕對的にはそれが悉く一念の内容であるゆゑ、これを信樂の下にのみ引かず、却つて略去されたところに、そうした深い妙味が窺ひ得られる。

聖言明知今斯心……故無有疑蓋

【科文】六結釋。信樂釋を結ぶ私釋の語。

【句釋】今斯心本願圓滿清淨眞實信樂 本願圓滿とは如來會上七一に大願圓滿とあり、圓滿は成就と同意語なれば、本願成就といふが如し。十八願で成就された清淨眞實なる信樂といふこと。 是名信心 因願の信樂を成就には信心と名づけてあるといふこと。 信心即是大悲心 如來の助けずばおかぬとある大悲心が、衆生に到り現れて信心となれば信心即是大悲心といふ。大悲廻向の願心が其儘に信樂として衆生に恵まれるのである。故無有疑蓋 これは機邊に於ける無有疑蓋とも見られるけれど、今斯心は本願成就の信樂であり、又信心即是れ大悲心であると示されたのだから、やはり佛邊に約す

る釋意と窺はれる。

### 七 欲生の約法釋

三者欲生即以清淨眞實信心爲欲生體

【科文】 三釋欲生六。初出體。已下復釋の中の第三欲生の釋である。

【句釋】 即以清淨眞實信心。前に出せる信樂のことである。信卷四五には、即以眞實信樂爲欲生體也とある。今は前に成就の文を引き、是名信心と信心即信樂たることを顯はしたれば、茲には信心といひ、而も至心と離れざることをも彰はして清淨眞實といふのである。此の如く欲生の體は信樂であり、信樂の體は至心であり、至心の體は名號であると、展轉して其體を彰される所以は、要するに三心は如來の廻向心であり、其廻向心たるや其實體六字の名號であつて、南無阿彌陀佛の廻向の恩德廣大不思議なる相に外ならずと示されたのである。

然流轉輪廻凡夫……無眞實廻向心

【科文】 二所由。欲生は如來の廻向たる所由を示さんが爲に、其對機を擧ぐ。

【句釋】 流轉輪廻凡夫曠劫多生群生。曠劫より流轉し多生に輪廻せる凡夫群生といふ

意。前の至心釋の穢惡汚染虛假雜毒、又信樂釋の具縛穢濁、孰れも煩惱具足の身たることを彰はし、今欲生釋に流轉輪廻等とは無有出離之縁の意味である。無清淨廻向心

無眞實廻向心。欲生は觀經の三心では廻向發願心に當り、之を法に約すれば如來の廻向心である。凡て佛道修行には廻向心を須要とする。凡夫に廻向心があるとしても、自力の廻向なれば汚穢不淨にして而も虛假不實である。清淨眞實の廻向心がないから、無有出離之縁の身であると、如來の方に清淨眞實の廻向心を起さねばならぬ所由を示す。是以如來因中……得成就大悲心

【科文】 三因行。

【句釋】 如來因中等 散善義至誠心釋に依る。廻向爲首得成就大悲心。淨土論廻向門の語。廻向爲首とは苦惱の有情を捨てずして、何につけ、衆生の爲にと利他廻向を先に立てること。大悲心とは大悲の願心のことで、不可思議永劫が間、一念一刹那も衆生の爲とばかり廻向を本として、その大悲願心を成就せられたのが、即ち如來の欲生心であるとの御釋である。



故如來以清淨眞實欲生心廻向諸有衆生

【科文】 四廻向。

【句釋】 清淨眞實欲生心。欲生心とは即ち廻向心のことである。如來の欲生心が衆生の機に届き現れて、決定的の願生心となる。

本願成就文經言……住不退轉 取要

【科文】 五引證。十八願成就の文の中、欲生心成就の文を引く。

【句釋】 文意は行章の下の如し。但し至心廻向の四字、前には承上起下の義として釋したけれど、今は之を欲生心の成就として之を引く。既に欲生心が即ち如來の廻向心なることは、前に顯はされたる如くとすれば、欲生心の成就が即ち至心廻向でなくてはならない。面して其大悲廻向心の衆生の機に現はれたのが、即ち願生彼國の思ひであり、それと同時に往生定まつて不退轉の位に住するのであるから、これを欲生心成就の文として引かれた。取要 信卷では唯除五逆誹謗正法の抑止まで引用してゐる。これは卷末に唯除逆謗の追釋を與へてゐられるから、それが爲の張本である。今略本には其追釋なければ、之を省略して取要の二字を置く。

聖言明知今斯心……是名廻向

【科文】 六結釋。欲生心の結釋である。

【句釋】 今斯心。欲生心のこと。如來大悲招喚諸有衆生之教勅。欲生心を法に約すれば、十方衆生に對して、我國に生れんと念へと喚びかけ給ふ大悲招喚の教勅である。されば銘文本に欲生我國トイフハ他力ノ至心信樂ヲモテ安樂淨土ニムマレムトオモヘトナリと釋せられたのもこれと同意である。即以大悲欲生心是名廻向 引文の至心廻向の語を釋して、これは如來の大悲心で成就せられた欲生心で廻向せられることであるというたのである。即ち諸有の群生を招喚したまふが欲生心であつてみれば、それが大悲廻向の心の外にはないのである。

## 八 會三爲一の釋成

三心皆是大悲……故一心也

【科文】 二會三爲一三。初直釋。已下正しく大經の三心と論主の一心とを會釋して、三心即一心の義を成するについて、初に直釋である。

【句釋】大悲廻向心故。これは欲生心の相。清淨眞實。これは至心の相。疑蓋無雜。これは信樂の相である。此の三つの相の中で、先づ欲生心は法に約して、他力の至心信樂を以て安樂淨土に生れんと願へと喚びかけたまふ大悲廻向の心とせられるから、これを三心皆是、大悲廻向心故と示し、後の清淨眞實疑蓋無雜の理由とせられた。而して至心の清淨眞實は信樂の體であり、信樂の疑蓋無雜は機に現れたるその相である。而して此に疑蓋無雜の言を出せるは、上の至心の下にも信樂の下にも無有疑心と結んであれば、今此に至つて正しく三信を疑蓋無雜の一信樂に攝めて、これを論主の一心と同一なりと判定し、故一心也と會同せられたのである。要するに上來明し來れる所ては、如來の方に成就せられた三信ではあるけれど、其三信たるや佛の方から衆生に廻向したまふ大悲の廻向心である。それゆゑその三心が衆生の機に現れたところでは、全く他力の一心に外ならずと、こゝに法に約する復釋の一段を結ばれたのである。

依之披師釋……乘彼願力之道略出

【科文】二引證。三心を合して一心としたについて、師釋を證據に引く。

【句釋】依之披師釋云。上來經論の三心と一心とが三即一なる旨を論證し來つたが、

此て更に師釋として善導の散善義の文を引く。西岸上人喚言。善導二河喻を設けて、彌陀の本願を西岸上招喚の聲として現はせる文で、愚禿鈔下左に祖釋がある。先づ有レ人喚言を阿彌陀如來誓願也と釋し、汝の言を行ナリ也斯則名ニ必定菩薩等と解せられた。この勅命の聞かれた時は、單なる十方衆生ではなくして、既に是れ必定の菩薩であると示された。一心正念は本願の三信十念であるが、愚禿鈔では一心言、眞實信心也、正念言、選擇攝取本願也、又第一希有行也と解せられた。直來十九二十の方便假門を捨て、直に本願の大道に來れと喚び掛けたまふ語。我能護汝。若不生者の成就せる相であつて、形攝取不捨之良也と釋せられた。衆不畏墮於水火之難。貪瞋の煩惱は日夜に起れども、まことの信心は彼等にも碍へられざれば、畏怖するに及ばぬとの仰せてある。又言。二河喻合法段の文。中間白道者。譬喻の中に、水火二河の中間に一の白道ありて、廣さ四五寸といへるその白道は何に喻へたのであるかといへばといふ意。即譬貪瞋煩惱中能生清淨願往生心也。貪瞋煩惱中とは、信心の發起せられる場處は、凡夫の現實の心であることを示し、能生の能は他力の手強さを詮はす語。生は發起といふに同じ。愚禿鈔下右言。能生清淨願往生心者、發起無上信心

金剛眞心也、斯如來廻向之信樂也と釋し、善導は願往生心といへる對聖道の語を用ひてゐれど、それは三信即一の信樂であることを彰された。次に 仰蒙釋迦發遣又籍彌陀招喚。已下は二河喩の總結段に出づる四句で、二尊の遣喚に信順する相を示す。不願水火二河。一心正念の相。乘彼願力之道。正しく本願の一道に乗託する相が、即ち上に出せる二尊の遣喚に信順して、己が貪瞋煩惱に目をくれず、眞一文字に進むばかりであると、明に示された。略出 本文には、尙ほ今信順二尊之意と念々無遺との二句あれど、今は之を省略したばかりか、二河喩の中から以上の文を抄出したれば、略出といふ。

【論攷】 問 茲に二河喩の三文を引けるは、何等の趣旨を證明せんとするのであるか。

答 次の私釋に、是知能生清淨願心是非凡夫自力心大悲廻向心故言清淨願心とあれば、次上の三心皆是大悲廻向心故、清淨眞實疑蓋無雜故一心也の三一會合の義を釋明せんが爲であることは動かされない。既に能生といふ、衆生貪瞋煩惱中に生ずれど、是は凡夫自力の所發でない。大悲願心の發起である。而もその大悲廻向の相はといへば、即ち西岸上に於ける招喚の呼聲に外ならないのである。又既に清

淨願往生心といふ。その清淨と言はれるは、大悲廻向の心なるによる。又その眞實なるは、貪瞋水火の難に妨げられざるによつて實證せられる。而してその疑蓋無雜の相といへば、偏に二尊の意に信順して水火二河を願みず、彼の願力の道に乗ずるにあり、これを教勅に一心正念といふ、この一心は本願の三心にして、而も論主の一心たることは言ふまでもない。愚禿鈔にはこの清淨願往生心を斯如來廻向之信心也と指定せられてある。されば三心即一の一心は信心にして、それが大悲廻向の心なることを顯はさんが爲に、特に此の二河喩の文を引證せられたのである。

問 茲に清淨眞實疑蓋無雜といへるは、これを約法と見るべきか、約機と見るべきか。

答 この三一問答の上で、疑蓋無雜といひ、無有疑心といはれてゐる語が、それが約法の如くに見えて而も約機であり、約機であるかと思へばそれが約法である。これ即ち機法一體の妙處にして、蓮師の御文に、機受に於ける一念歸命の信相をいつも名號六字の謂れて示されたのも、全くこの妙味である。されば此の二河喩の文にあつて、白道は唯一の四五寸白道なれど、これを前には衆生貪瞋煩惱中の機に於ける清淨願往生心に喩へたりとなし、後にはこれを法に約して所乘たる彼願力之道と合法せられてゐる。

同じ一の白道が機にあつては信心と見られ、法にあつては本願と見られてゐる。これを眞要鈔本<sup>註</sup>に、コノ一念歸命ノ信心ハ凡夫自力ノ迷心ニアラズ如來清淨本願ノ智心ナリ、シカレバ二河ノ譬喩ノナカニモ中間ノ白道ヲモテ、一處ニハ如來ノ願心ニタトヘ、一處ニハ行者ノ信心ニタトヘタリ。……コレスナハチ行者ノオコストコロノ信心ト如來ノ願心トヒトツナルコトヲアラハスナリと明に指摘せられてある。然れば他力の一心は全く能所を離れ機法を超えた絶対的な智心であつて、略本の開顯するところは、絶対的な安心であり、それが純粹眞實の世界であることが、この引證で知られるであらう。是知能生清淨……言清淨願心

【科文】 三釋成二。初釋清淨願心。已下は上の引文を釋して其義を成立する中、初に清淨願心から釋す。

【句釋】 能生清淨願心等 衆生の貪瞋煩惱中に能く清淨願心を生ずとあれば、それは衆生の貪瞋煩惱の胸の中から生じたものに相異なる。併し之を取り違へて凡夫自力の心だと思つてはならぬ。それが其儘に如來の大悲から廻向せられた心であるゆゑ、清淨の言を添へて清淨願往生心と言ふのであると、こゝに凡夫貪瞋の心の中へ、他力の一心を

獲得することは、如來の大悲廻向心から發起することを明かにせられた。如來の願心から云へば廻向であり、衆生の機から云へば、能生であり、また發起である。故に愚禿鈔下<sup>註</sup>に言能生清淨願往生心者發起、無上信心金剛眞心也、斯<sup>レ</sup>如來廻向之信心也と釋して、能生と發起と廻向とをこゝに引き合せてある。一念發起の當體では、衆生の能生能發が其儘に願力の能生能發であつて、其能生能發の外に、廻向といふことはないのである。こゝを御文<sup>註</sup>では、南無ト歸命スル一念ノトコロニ發願廻向ノコ、ロアルベシ云云と仰せられ、機法一體の六字として、一念發起即發願廻向であるところに、他力廻向の安心を示されてある。

爾者一心正念者……即是念佛

【科文】 二釋一心正念二。初釋正念。已下一心正念の語を釋するに、順序を逆にして正念から釋する。

【句釋】 爾者一心正念者 上に清淨願往生心は大悲廻向の心であると斷じたから、それを承けて、爾らば其願往生心が大悲廻向心であれば、それは招喚の教勅にある一心正念でなくてはならぬ。其一心は即ち本願の三心であり、其正念は乃至十念であると見ら

れたのである。正念即是稱名稱名即是念佛。稱名と念佛とに轉釋して、こゝの正念は信心のことでない、稱名念佛を正念といふのであると定められた。

【論攷】 問 こゝは三一問答の下だから、たゞ一心だけを釋すればそれでよい。何が故ぞ先づ正念を釋するか。

答 行信は不離なれば、上の行の一念轉釋に信を出せるが如く、こゝは一心の釋なれど、先づ正念の行から釋したものと考へてよい。行といへば必ず信、信といへば必ず行、これは一體兩面て引き離さうとしても引き離されない。已に一心の信が大悲廻向であれば、正念の行も亦大悲廻向である。略本に於ける行中攝信の態勢は、全く一部の終始を貫いてゐること、他力の稱名は他力の信と絶對的に相具して離れない。そこが汝一心正念にして直ちに來れと、一心正念の二つ揃へて喚ばせたまふ招喚大悲である。

一心即是深心……名如實修行相應也應知

【科文】 二廣釋「一心」。こゝに一心を釋する爲に轉釋十五を設く。

【句釋】 一心即是深心。十八願の三信を合して一心とすれば、三信は一信樂に收まる。其信樂は觀經の深心に當る。深心即是堅固深信。深心を善導釋して深信之心

といふ。この深心こそ更に四重の破人にも傾動せられず破壊せられぬ堅固の心なれば之を堅固深信と名づく。堅固深信即是眞心。序分義右禮讚共に眞心徹到とありて、堅固深信の人は眞心徹到の人であるといふ。眞心即是金剛心。十四行偈に共發金剛心、散善義此心深信由若金剛とあり。眞心徹到スルヒトハ金剛心ナリケレバの意である。金剛心即是無上心。十四行偈に各發無上心。般舟讚に我等無上信心とある。此上のない勝れた信心といふこと。無上心即是淳一相續心。上の五轉は善導に依り、已下曇鸞に依る。これ善導の一心正念は天親より出づるも其一心を能く註解したのが曇鸞だからである。淳一相續心とは論註下三に論の如實不如實を釋して、如實修行の稱名とは淳一心相續心の三心具足せるにありとし、之に反するを不如實修行とした。論の建めに我一心といへるは、如實の稱名たることを彰はすのであると、こゝに一心を開いて淳一相續の三心となせることを示された。されば今無上心とは淳一相續の心であると轉釋せられた。淳一相續心即是大慶喜心。讚阿彌陀偈に信心歡喜慶所聞とあり大經に得大慶とあるに依る、往生一定して大いに慶喜する心である。獲大慶喜心是心違三不是心順三信。前の如く已に淳一相續心が即ち大慶喜心であつてみれば、こ

の大慶喜心を獲たものは、三不に違し三信に順ずるに相異なる。是心即是大菩提心。是心は上の大慶喜心。横超他力の菩提心なれば大菩提心といふ。大菩提心即是眞實信心。禮讚に眞實信心の語あり。眞實信心即是願作佛心。論註下二六に菩提心を願作佛心度衆生心て釋す。本は易行品九若人願レ作レ佛心念二阿彌陀一とあり、願作佛心即是度衆生心度衆生心即是攝取衆生安樂淨土心。論註下二六の文に依る。是心即是畢竟平等心。信卷の轉釋二九では此下で願海平等故發心等發心等故道等道等故大慈悲等大慈悲是佛道正因故と論註上二の文に依つて平等の大慈悲を釋せる四等が列ねてある。されば今の畢竟平等心とは平等大悲の心のこと、考へられる。是心即是大悲心。前より推して知るべし。是心作佛是心是佛。觀經第八像觀に出づる語、宗祖は之を經の隱の義から他力信心のこと、なし、其文意を轉じて、是心作佛の是心は上から推して他力信心のこと、其信心を因として作佛するのであると解せられたやうである。次に是心是佛とあるも、此信心は凡夫自力の心でない。全く如來廻向の佛心であるゆゑ、是心是佛といふと見られるのである。是名如實修行相應也。論註下三に三不を明し了つて、與此相違名如實修行相應とある語を取る。信卷ではこゝに是心

作佛是心是佛の引文を終つて、故知一心是名如實修行相應の私釋ありて、一心の言を加ふ。されば今も上來一心を轉釋し來つて、こゝにそれを總結し、この一心あつてこそ、これを論註には如實修行相應と名づけて、稱名念佛が如實の行たり得るのであると知れよと、最後に應知の二字を置かれた。三心即一心之義答竟

【科文】 三結答。三一問答の初に問があつて、其答の科が三に分れた中の第三である。

【句釋】 三心即一心之義。上來の問答及び復釋甚だ長いことであつたが、要するに三心即一心の義に外ならず、それを是までのところに已に答へ畢つたのであると、總じて上を結ばれたのである。

### 九 大觀二經の三心

又問大經三心與觀經三心一異如何。

【科文】 二因會大觀三心二。初問。問答に三ある中第二の問答である。上の經論三一を會するに因んで大經の三心と觀經の三心と一であることを會釋する。

【句釋】又問。上の一問答が畢つて第二の問答なれば又問といふ。一異如何。大經には至心信樂欲生と説き、觀經に至誠心深心廻向發願心と説く。これを一なりとせんか異なりとせんかとの問である。

【論攷】問。廣本では此の問答及び次の小經に關する問答をば、方便の卷たる化卷に出してゐる。何が故ぞ略本は上の三一問答と一連に之を茲に出せるか。

答。廣本は三經差別門の立場で、眞假を批判するを其の綱格とする。故に眞實五卷の外に第六化卷を設けたれば、觀小二經に關する問題は之を化卷にて論ず。然るに略本は三經一致門に依つて偏に弘願眞實を説くを其の主旨とする。されば別に方便假門の章を開かさざれば、觀小二經に關する問答をも因みに此に連ねたこと、推せられる。

問。然らば教章に於いて、廣く三經を指標して所依の經典を示すべきではないか。已に三經一致門に依るといはゞ、何が故ぞたゞ大無量壽經のみを眞實教となせるか。

答。觀小二經には隱顯の義がある。されば化卷では二經に於ける隱顯の義を判じて、先づ觀經には二經之三心依レ顯義ニ異ナリ也依レ彰之義ニ一ナリ也四九左と隱義に於ける一致を示し、更に小經に准知隱顯の義を開出して、その終を今按ニ三經一皆以レ金剛眞心一爲ニ最

要一四九左と結んである。されば三經一致門といふは、その隱の義に依れるものであつて、顯の義に依れるものではない。もし顯の義で言へば、如來の本願を説くを以て宗とするは、大經であつて、觀小二經ではない。前に數々説ける如く、本鈔は絶対の立場にあるのであるが、その絶対の立場といふことは、大經にのみあるのであつて、觀小二經の上に其立場があるのではない。この大經に開顯された弘願眞實の立場から、觀小二經を見てゆくと、始めてそこに隱顯の義が闡彰せられるのである。それゆゑ隱の義に依れる三經一致門といふことは、大無量壽經の絶対眞實の開顯があつてこそ、其上に成立する三經の見方である。されば眞宗所依の經はといへば、汎くは總依三經であるけれど、其中に於ける別依は即ち大經一部である。別して大經一部を所依とする所に、特に此の略本に於ける絶対的の立場が基礎づけられてゐる。これ即ち教章に總じて三經を出さずして、單に大經一部を出せる所以である。

問。略本は三經一致門から觀小二經の問題を此に出せりと言はゞ、廣本も亦これを信卷に出すべきではないか。何が故ぞこれを化卷に出せるか。已に別序に廣ヲ蒙リ三經ノ光澤ヲ特ニ開シ一心ノ華文ヲ云云と言うてゐる。これ亦三經一致の義であるといはゞ、愈々以て

因みにこれら觀小二經に關する問答を信卷に出すべきではないか。

答 觀經に於ける廢立の義は、行を批判の對象となせるに反して、隱顯の義は自力から他力への信の轉廻が、その判釋の基調とせられてゐる。されば化卷に出された隱顯の釋義は、全く信の眞假に關する問題であつて、そこに隱顯釋と三一問答との内面的聯繫がある。これ即ち其最後が三經大綱雖有顯彰隱密之義彰信心爲能入……今將談一心一異義當此意也、三經一心之義答竟四九五と結ばれてある所以であらう。然るに信を相對的に見れば、眞假批判の根據は信にあるのだけれど、それと同時に從假入眞の轉廻も亦信にあることは、三願轉入の過程に現れてゐる。而も其信は常に如來選擇の願心に導かれるのであつて、方便の方便たり得ることは、眞實があるからである。苟も眞實のないところに、方便のあり得る筈はない。これ即ち化卷四五右に、然今據大本超發眞實方便之願亦觀經顯彰方便眞實之教……依此按方便之願有假有眞と提示せられた所以であらう。されば廣本としては、化卷に於ける方便から眞實へと轉入するところに、その組織の要諦があるのであつて、觀小二經に於ける一異の問題は、これを化卷に出さなくてはならない。寧ろ經論會合の三一問答を信卷に出

し、觀小二經に於ける一異を化卷にて判定せられた所に、前後聯繫せる一貫の精神が現れる。是れ或は別序に廣蒙三經光澤と感嘆せられたものであり、又略本が此に前後の三問答を取纏めたることも、また一面に廣本で信卷と化卷との繋がる三經一致の見方を示誨せるものとして、其趣旨を窺ふべきである。

答兩經三心即是一也

【科文】 二答三。初直答。

【句釋】 即是一也。體即全是の一なることを顯はす絶対的な四字である。廣本ではこゝて直には答へず、先づ隱顯の義を釋して、兩經の三心顯の義では異、隱の義では一といふ結釋となつてゐる。今は前に經論の三一を會釋せる餘勢に乗じて、初めから三經一致の吐て問題を取扱はれたのであるから、即是一也と直に答釋せられたのである。

何以得知宗師釋云至誠心中云至者眞誠者實

【科文】 二釋由二。初引文三。初至誠心釋。大觀二經の三心全く同一である理由を釋するにつき、已下其證文を引く。

【句釋】 何以得知。徵起して其所由を釋す。宗師釋云。こゝでは善導を宗師とい



ふ。觀經に關しては善導一師の釋に依つて問題を解決しなくてはならない。至誠心、中云至者眞誠者實。散善義至誠心釋の初に出づる字訓を擧ぐ、これは前の至心の下に出された字訓なれば、その意味は説明を要しない。但し次に引く禮讚の深心、即、是眞實信心とある眞實の字に絲の繋がれてゐることに注意せらるべきである。

就人就行立信中云、一心專念彌陀名號、是名正定之業。

【科文】 二深信釋二。初疏文。

【句釋】 就人就行立信中云 散善義の深信釋に七深信と分けて釋せる中、第七深信の下に、就人立信と就行立信とが分れてゐる。其中就人立信の人と指されるものに就き、種々の見方があるけれど、要するに釋迦及諸佛の能説の人に就いて、己が信心を打建てるのが就人立信であり、又其所説たる本願の行に就いて信心を打建てるのが就行立信である。即ちこれを人法で言へば、佛語に虚妄なしと言はれる佛陀の人格を信用して、之を信ずるといふ人を對象とする信と、又經典に説かれた所説の法を信ずるといふ法を對象とする信とである。善導は深信を釋するに、此の二つの信の形式を分けられたのが、即ち就人就行立信である。一心專念彌陀名號是名正定之業。これは五種の正行について、正助二業を分別する中の正業を明す文であつて、いつも出る通りである。

【論攷】 問 一心專念彌陀名號の正業を明す文は、疏文では就行立信の下に出てゐる。何が故ぞ今特に就人就行立信中云と、こゝに就人立信までも標出せるか。

答 散善義に、一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨捨者、是名正定之業、彼佛願故とあるは、常に引かれる稱名正定業の文である。これは就行立信の中の文である。然るに同様に、一心專念彌陀名號定得往生と二ヶ處まで出てゐて、これは就人立信の中の文である。されば一心專念等の語は、就行立信の中だけでない。就人立信の中にまで出てゐれば、今こゝに就人就行立信の中と前後を統べて示されたのである。

問 就行立信の中の文のみで事足るべきに、何が故ぞ茲に就人立信までを出されたのであるか。

答 選擇集二行章に、就行立信者と標して此文が引かれてある。これが就行立信の文であることに氣づかれぬやうな宗祖ではない。特に是名正定之業の語は、就行の中にあれど就人の中には其儘に出てゐないのである。然るに宗祖が就人就行俱に標出し給

へるは何等か理由がなくてはならない。思ふに就人は教であり就行は行であつて、之を配すれば釋迦彌陀の二尊に當る。これを前の二河喩に於ける遣喚に考へ、之を後に出づる明<sup>ニ</sup>知<sup>シ</sup>緣<sup>ニ</sup>二尊<sup>ヲ</sup>大悲<sup>ニ</sup>獲<sup>タリ</sup>一心<sup>ヲ</sup>佛因<sup>ヲ</sup>の結嘆に照らせば、就人と就行とは一應釋迦彌陀の二尊に配すべきで、この二つは到底引き離されるものでない。而もそれを就行の上に就人を統攝し、これを立信の對境となせるは、教行の二つを見るについて、兩者の位置の規定せられるものであると考へ得られる。されば疏文に於ける就人立信の釋を見るに、釋迦諸佛の勸讚といふも、要は一心專念彌陀名號といへる就行立信へと結歸せられてゐる。隨ひて宗祖が此下の就人立信の釋を信化兩卷に重引して、これを眞假に通ずる文と見たまへるもの、そこに深意の存することと窺はれる。一心を離れて如實の行なく、如實の行を離れて教なきことは、廣本にあつてもそれが故<sup>ニ</sup>知<sup>ス</sup>一心是<sup>ヲ</sup>名<sup>ニ</sup>如實修行相應<sup>ト</sup>即是<sup>レ</sup>正教是<sup>レ</sup>正義云々と、三二問答に於ける最後の結釋とせられてある。又云深心即是眞實信心

【科文】 二禮讚。

【句釋】 又云 往生禮讚<sup>ノ</sup>の文。

深<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>即是<sup>レ</sup>眞實信心。善導が第二深心を釋して眞實

信心であるといはれる。上に至誠心釋を出して、至<sup>ト</sup>者眞<sup>ニ</sup>誠<sup>ト</sup>者實<sup>ト</sup>と示された。されば眞實の二字は至誠心から來り、深心に當つるに成就の文の信心を以てせられた。是れ三信其體一にして、至誠心も深心に收まり、深心即ち他力の信樂であることが顯されてゐる。

廻向發願心中云此心深信由若<sup>ニ</sup>金剛<sup>ト</sup>

【科文】 三廻願心釋。

【句釋】 廻向發願心中云 散善義<sup>ヲ</sup>廻向發願心に兩釋あり、初は經の顯の義で、化卷會八<sup>三</sup>に引き、後は隱の義で信卷會四<sup>五</sup>に引く。今は後の隱の義の中に出づる文である。此<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>深信。廻向發願心を押へて此心といふ。深信<sup>ト</sup>とは廻向發願心の内容を示すに、第二の深心を以てせられたもので、由若<sup>ニ</sup>金剛<sup>ト</sup>といふも全く深心の相である。されば宗祖は此語が第二深心に第三廻向發願心を收め、三信其體全く一なること顯はすものと見られること、次の私釋で知られる。

明知一心是信心……至誠廻向之二心

【科文】 二私釋。大觀二經の三心一異の答を結ぶ私釋。

【句釋】 一心是信心。深信釋の上で、第二の深心を一心と名づけてある。又その深心を即是眞實信心ナリと云うてある。されば一心は是れ信心であると成立する意。かく第二の深心を一心と名づけて、此の一心に至誠心も廻願心も攝まれば、三心即一と言はれるとの根據として、先づ一心は是れ信心であると示された。專念即正業。善導て專念といふは口に名號を稱へることて、これが是名正定之業の念佛であると示された。即ち一心の信に離れぬ念佛の行であつて、由若金剛とあるが即ち正業の正業たる相である。一心之中攝在至誠廻向之二心。第二の深心を一心として、その一心の中に至誠廻願の二心が攝まる。それは信心の中へ至心欲生の二心が攝まりて信心即ち一心であると全く同じいから、大經の三心と觀經の三心とが全く同一であると見られたものである。

向問中答竟

【科文】 三結答問。上來の答の中に直答、釋由、結答問の三科ある中の第三である。

【句釋】 向問中。向問とは前の第一の問答のことである。向の字サキと訓み、今に對する昔をいふ。前にといふと同じ。答竟。答の中に答へ竟るとあるべきに、問の中に答へ竟るでは聞えぬ、併しこれは前の問答の中に問へる所を已に答へ竟るとの言の略

である。大經の三心が一信樂に歸して三心即一なることは、已に第一の問答で答へ畢つてゐる。然るに今亦觀經の三心について、其中の深心に三心を收めて、三心即一心の義が明かに知れた故に、それなれば大觀二經の三心即是一也といふことは、言はずと知れたことであらうと、答問を結んだのである。

一〇 兩經小經の一異

又問已前二經三心與小經執持二異如何

【科文】 三因會小經執持二。初問。第三の問答であつて、大觀二經の三心と小經の一心とを會釋して、三經一致を顯はす一段である。

【句釋】 已前二經。此の前に論じた大觀二經のこと。即ち前に已に大經の三心と觀經の三心と一致せることを顯はしたから、今度は小經に對照したのである。小經執持。小經に執持名號一心不亂と説く。それと一なりや異なりやの問である。

【論攷】 問 廣本では大觀の三心を小經の一心に對して一異の問を發してゐる。今何が故ぞ茲に小經の執持に對して問を發せるか。

答 先哲の見解區々である。或は云く執持は即ち一心である。故に一心の事を執持といはれたまでのこととて、別に意趣があるのではないと。或は云く、小經にあつて一心は隱顯の兩義に通ずれど、執持の言に隱顯はない。化卷では一心の隱顯を判ずれば、一心に就いて一異を問答したけれど、略本には隱顯の判がないから直ちに執持に就いて問答したのであると。今云く、小經の執持の言に隱顯あるかなきかに就いては古來二義がある。一は隱顯を立てる義、一は隱顯なしと見る義。其中隱顯を立てる義では、小經では所修の名號に隱顯はないけれど、能修の機には隱顯ありと見るのである。既に一心不亂の一心に隱顯があるとすれば、執持にも亦隱顯あるべき筈である。化卷(會九<sup>九</sup>)に孤山、疏を引き執持の釋を出せるは、經の顯の義を示さんが爲であると見てゐる。されど又執持に隱顯なしと見る義では、小經の執持名號は、觀經流通の持名を承けたものである。流通の念佛は已に定散方便を廢捨した弘願の念佛である。さればそれを受けた小經の執持名號も亦隱顯なしと見るのが至當であると見るのである。然らばこの執持の言に隱顯有無の二義何れを取るべきかといふに、今且らく後義に従ひ執持には隱顯なしと見る説に伴ふ。已に執持に隱顯なしとすれば、略本の絶對的の立場として自力定散に通ず

る一心の言を避けて、執持の言を出せることは當然である。加之、執持名號の言は覺師は之を傳承の要語として其述作を執持鈔と名づけ、蓮師が其一代に念持の義を強調せられた上から見ても、漫に之を定散自力に通ずるとは容されぬ。而して執持名號といへば、通常これを信に約して釋するけれど、其信は行を離れたる信ではない。執持鈔<sup>左</sup>に、モシ名願力ヲ稱念ストモ、往生ナラ不定ナラバ正定業トハナヅクベカラズ。我ステニ本願ノ名號ヲ持念ス、往生ノ業ステニ成辨スルコトヲヨロコブベシト、執持の意義を闡明せられてある。故に執持名號は只金剛の信心ばかりを顯はすにあらず、他力念佛を顯はす句にもなると心得よと、先輩が申し傳へる所である。然れば略本の行中攝信といへる絶對的の立場は、前の觀經の下でも一心專念といひ、この小經の下でも執持名號といふて、どこまでも行信不離のそれが一貫してある。略本が一心と言はずして執持と言はれたのは、斯うした意趣も認め得られないことはない。

答經言執持名號……一心即信心

【科文】 二答二。初引文答釋。小經の文を引いて、その解釋を與へられるのが、即ち問に對する答である。

【句釋】 經言執持名號。小經に往生の正因を明して、聞説阿彌陀佛執持名號……一心不亂と説く。執者心堅牢而不移持者名不散不失。執の字は耽りと手に把握するといふ意。持の字は手に持つて離さぬ形である。即ち金剛堅固の信心のこととて、これを心堅牢云々と釋せるは、群疑論四<sub>三</sub>雜修之者爲執心不牢之人<sub>一</sub>故生<sub>三</sub>懈慢國<sub>一</sub>也。……專行<sub>三</sub>此業<sub>一</sub>此即執心牢固<sub>ニシテ</sub>定生<sub>三</sub>極樂國<sub>ニ</sub>也（化卷本會八<sub>左</sub>八所引往生要集）に據る。又名不散不失は論註上<sub>左</sub>に、持名不散不失<sub>一</sub>を採る。是等の御釋は執持を金剛の信心のことにせられたのである。故曰不亂。經の不亂の語と執持とを一にせられる。是れ執持と一心とを一にする御釋である。執持即一心。上を承けて、小經の執持は即ち兩經の三心即一の一心に同じといふ意。一心即信心。其一心は即ち前に明し來れる如く信心である。されば小經の執持は大觀二經の三心と全く同一であると示された。然則執持名號……特可仰之。

【科文】 二結勸歸仰。上に釋せる執持名號と一心不亂とを此に結びて、歸仰を勸めらる。

【句釋】 執持名號之眞説。此小經は一代の結經であり又三經の結經であつて、而も出世本懷の眞實教なれば、之を眞説と嘆じ、而も其所詮は執持名號の四字にありとする。

一心不亂之誠言。別して小經は諸佛の證誠を説きて釋尊も亦之を證誠すれば之を誠言と嘆じ、而も一心不亂の言を以て執持名號の執持を顯はす。必可歸之特可仰之。釋尊の誠言に歸し、出世本懷の眞説を仰げと勸獎せらる。

## 第五 結嘆釋の解説

### 一 三經隱顯と一心能入

論家宗師開淨土眞宗……彰如是之義

【科文】 二結歸一心佛因二。初明一心爲能入。已下問答段の大科第二として、一心こそ成佛の因種であることに結歸せられた。三一問答の結嘆ではあるけれど、これは一部の結嘆とも見られ得る。されば略本の態勢行中攝信にありといふも、その最後は信心正因の義に結歸せられてゐる。

【句釋】 論家宗師 化卷四九七には、是<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>四依弘經、大士三朝淨土、宗師開眞宗念佛<sub>ヲ</sub>導<sub>リ</sub>濁世<sub>ノ</sub>邪僞<sub>ヲ</sub>三經大綱云云とあり、故に論家は龍天二祖、宗師は曇鸞以下の五祖である。開淨土眞宗 淨土眞宗を開立し、三經の大綱を末代に傳へたのは、七高僧であるといふ意。御傳鈔下卷 恭<sub>ク</sub>彼三國ノ祖師ヲノ<sub>コ</sub>ノ一宗ヲ興行ス。所以<sub>ニ</sub>愚禿勸ル<sub>ト</sub>コロ更ニ私ナシとあると其旨同じ。導濁世邪僞 七祖の對機とするところは、末代濁世の邪僞奸詐の輩にありといふこと。偈に弘經、大士宗師等拯濟、無邊極濁惡とあるに同じ。三經大綱雖有隱顯一心爲能入 三經には其大綱として隱顯の二義があるけれど、唯他力の一心を能入とするといふこと。故經始稱如是 如是我聞の如是の語、經の始に出でたるを、龍樹は釋して佛法大海<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>信<sub>ヲ</sub>爲<sub>ス</sub>能入<sub>ト</sub>といふ。今七祖が濁世の邪僞を導いて、三經の光澤を蒙らしめるにも、經の初に如是とあると同じく、一心を以て能入とせられるといふ意である。論主建言<sub>ニ</sub>一心<sub>ニ</sub> 論註下<sub>三</sub>是<sub>ヲ</sub>故<sub>ニ</sub>論主建言<sub>ニ</sub>我<sub>ノ</sub>一心<sub>ト</sub>と出づ。古く初起<sub>ヲ</sub>曰<sub>ク</sub>建<sub>ト</sub>と釋し、建をハジメと訓む、義訓である。即是彰如是之義 論註下<sub>三</sub>經<sub>ノ</sub>始<sub>ニ</sub>稱<sub>ル</sub>如是<sub>ヲ</sub>彰<sub>テ</sub>信<sub>ヲ</sub>爲<sub>ス</sub>能入<sub>ト</sub>……論<sub>ノ</sub>初<sub>ニ</sub>歸禮<sub>ハ</sub>明<sub>ニ</sub>宗<sub>旨</sub>有<sub>ラ</sub>由<sub>ニ</sub>據<sub>リ</sub>、こゝに經の始の如是と論の初の歸禮とを對句にしたれば、その意を取つて、今亦經の始の如是と論の建章の一心とを照合し、俱に信を以て能入とする旨を顯はせるものと見られたのである。然れば上來四法を總説して他力安心の機構を顯はし、又偈頌を作つて其傳統を示し、更に三一問答を叙べて其根源を明證したれども、其肝要はたゞ他力の一心にある。經といひ論といひ、唯一心を以て能入とすることを結嘆せられた。

問 觀小二經に隱顯あることは、祖釋已に明かである。されど茲に三經大綱雖有隱顯といふ。然らば大經も亦隱顯ありと見るべきか。

答 大經には隠顯なし。若し隠顯ありとせば、大經亦方便經となつてしまふ。然るに今三經、大綱雖有<sub>レ</sub>隠顯<sub>ニ</sub>といへるは、言總意別である。言の上では總じて三經とあれども、其意は別して觀小二經に隠顯ありとのことにて、顯眞實教たる大經には隠顯はないのである。

問 古來大經に隠顯を立てる學說あり。云く、方便には必ず隱に眞實を含む。されば化卷に於いて十九願の下では按<sub>ニ</sub>方便之願<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>假有<sub>レ</sub>眞といひ、二十願の下にも就<sub>ニ</sub>方便眞門<sub>ニ</sub>誓願<sub>ニ</sub>亦有<sub>レ</sub>眞實有<sub>レ</sub>方便<sub>ニ</sub>と宣ふ。願意已に眞假を含めば、其說に隠顯ありと見なくてはならない。斯くも願に已に眞假の兩面あつて隠顯が立てば、十九願成就の三輩段も亦隠顯が立つこととなる。故に選擇集ではこれに廢助傍の三義を設く。これ大經に隠顯ありと見らるゝ所以であると云云。大經に隠顯ありと見ること道理あるが如し。然るに今隠顯なしと言はゞ、如何に之を解決すべきか。

答 方便には必ず隱に眞實を含めることは命を聽く。されど大經では其眞實が第十八願として顯露に説かれてゐる。化卷に方便の願に有<sub>レ</sub>假有<sub>レ</sub>眞といへる眞とは、善導が言<sub>ニ</sub>弘願<sub>ニ</sub>者如<sub>ニ</sub>大經<sub>ニ</sub>說<sub>ニ</sub>と指示せる如く、大經に開顯せられた弘願眞實でなくてはならぬ

い。されば眞實あつての方便であつて、眞實のない所に方便はあり得ない。三輩章に於ける廢助傍三義の如きは、これを但念佛助念佛但諸行の三意（漢語燈一<sub>三五</sub>）と名づけられる如く、單に行に於ける廢立の沙汰に過ぎない。宗祖に於ける隠顯の義は、疏の釋相に依れる廢立ではなくて、更に深く釋意を酌めるものであると言はれてゐる。されば大經に方便の願あり、又其願の成就が説かれたればとて、大經に必ずしも隠顯ありとは言はれない。

問 略本は方便を去つて偏に眞實に就くといふ。何が故ぞ今此に方便に關する隠顯の義を出せるか。

答 論家宗師が濁世の邪偽を導くにつき、一心を能入とすることを明す。これ機の趣入に關する説示である。隠顯の義は單なる教説に於ける一文兩義のことではない。趣入の機が從假入眞の轉廻に於ける場合に、教の引入方便に於いて、表には方便、裏には弘願といふことが救ひの意味を持つ。即ち隠顯義の趣旨は、定散諸機各別ノ、自力ノ三心ヒルガヘシ、如來利他ノ信心ニ通入セントネガフベシと言へる弘願轉入にあるのであつて、そこが茲に一心爲能入<sub>ニ</sub>と言はれてゐるところである。されば觀小二經の説に隠顯

あり、大經の説は顯眞實であるといふことは、三國七祖の傳ふるところ全く一貫して、この他力の一心を能入となし、自力の三心ひるがへし、如來利他の信心に通入せしむるにあると知らせられたのである。

## 二 獲信の因縁

今披宗師解云……各益不同也

【科分】 二顯獲信因縁二。初引文二。初定善義。上に一心を能入とすることを明し、今は獲信に就いての因縁を顯はす中、先づ文を引く。

【句釋】 宗師解。善導の釋、定善義<sup>三</sup>に出で、觀經第十三觀の阿彌陀佛神通如意とある如意の語の解釋であり、信卷會四<sup>九</sup>亦之を引かる。言如意者有二種。如意に二義を開く。一者如衆生意隨彼心念皆應度之。初義は衆生の意の如くと解し、機に約する釋である。即ち衆生の心念に隨つて之を度するといふ意味で、この心念とは普通なれば衆機區々の心念であるが、これを安心に約すれば、心念は一心一念であつて、彼の心念に隨つて度するとは、南無とたのむ衆生を助けるといふ意に取れないことはない。

い。二如彌陀之意。後義は法に約する釋である。故に如意を解して彌陀の御意の如しといふ。五眼圓照六通自在。肉・天・慧・法・佛の五眼、圓かに照らし、又神足・天眼・天耳・他心・宿命・漏盡の六通自在である。觀機可度者。安心ていへば一念發起の機である。一念之中無前無後。是れ廻向の相であつて、一心の中に前なく後なきは時剋の極速である。身心等趣三輪開悟。身も心も等しく十方世界どこにも趣き、身口意の三輪（輪は摧破の義）を以て不信の機にも信を得しむるをいふ。各益不同也。其機々に利益を與へるをいふ。以上之を要するに、如意自在にあらざれば、廻向は達成せられない。それが一は約機の釋、一は約法の釋であること、恐らく是れ彌陀と衆生と能所機法は一の相を顯はせるにはあらざるか。又言敬白一切往生……我等無上信心已上

【科文】 二般舟讚。

【句釋】 又言。宗師善導の般舟讚の文。一切往生知識等。茲に知識とは知友知音などいふと同じく友達のことである。有縁の道俗悉く淨土參りの友達なれば往生知識といふ。大須慚愧。平常使ふ慚愧と其意味を異にし、支那の俗語では忝けないと禮を



いふ語。辱の字をかたじけなくと訓むやうに、過分なことだと痛み入る意。釋迦如來實是慈悲父母。和讚に、釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母等。また末燈鈔たふ般舟三昧行道往生讚ト申ニオホセラレサフヲフマイラセ候ヘバ、釋迦如來彌陀佛我等ガ慈悲ノ父母ニテ云云。釋迦といへば彌陀は離れぬ。こゝらが眞宗の釋尊は、彌陀あつての釋迦といはれるところである。種々方便。前の神通如意の如きをいふ。發起我等無上信心。一念發起といふ發起の語は此に出づ。如來會に能發といひ又能生といふ。無上信心唯信鈔にに、無上智惠ノ信心とあり。明知緣ニ二尊ノ大悲ニ……最勝人也

【科文】 二正嘆獲佛因。

【句釋】 明知。上の引文に彌陀釋迦二尊の善巧方便に緣つて、我等が無上の信心を發起せしめたまふことを嘆ず。近くそれを承けて明知ニといふ。緣ニ二尊大悲ニ。二尊一致の大悲をいふ。二河喻には信順シテ二尊意とあり。今を結嘆と見れば、上の三信即一心を明す所に二河喻を引く。そこに衆生貪瞋煩惱中に、能く清淨願往生心を生ずるとあるが、二尊の遣喚に依る。遠くはそれを承けての緣ニ二尊大意ニの語が出て來てゐる。

獲ニ一心佛因ニ。上來問答を重ねて、本願の三心を論主之を合して一心と爲したまひ、それが觀經の三心、小經の執持と同一であることを論證せられた。その一心のことを茲に佛因といふ。佛因とは成佛の因種である。涅槃經に說阿耨多羅三藐三菩提信心ヲ爲ト因是菩提因雖復無量ニ說ニ信心ヲ已ニ攝盡シ（信卷會四五九所引）とあり、又選擇集本ニ涅槃之城ニ以レ信ヲ爲ス能入トとある。眞宗に於ける成佛の因は唯此の信心一つであると顯された。行卷九左では光明名號を父母に喩へて、これを外緣とし、信心を業識に喩へて之を内因とせられた。今爰では信心を内因とし釋迦彌陀を外緣とせられた。これ即ち人の教勅からいへば、釋迦彌陀の二尊が他力と呼ばれる主體である。釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母、種々ニ善巧方便シ、ワレラガ無上ノ信心ヲ、發起セシメタマヒケリと、貪瞋煩惱の心の中へ清淨願往生心の發起せられるは、全く二尊の遣喚に緣る。されば同じく他力と稱せられるに、光明他力あり又名號他力あり、序文の發端に夫無碍難思等とあるがそれである。又之を因位から云へば本願が他力である。行章の下に本願力廻向有二種相一とあるがそれである。是等は孰れも法を他力となせるものであるが、若し他力を人の主體に求むれば、二尊一致の大悲であることが、此の下に顯はされてゐる。當知斯人希有人

最勝人也。散善義<sup>三</sup>に五種の嘉譽をあげた中の二を出す。愚禿鈔下<sup>二</sup>にも亦二河喩の文を釋して、五種の嘉譽悉く之を列ぬ。當知斯人とは上の佛因たる一心を獲た人て、愚禿鈔では之を必定の菩薩と呼んでゐる。而して此の嘉譽は元と觀經の是人名芬陀利華の語を釋したものであるが、淨土論<sup>七</sup>ではこの信心を淤泥華と言うてゐる。芬陀利は白蓮花であり、淤泥華も蓮花の淤泥から出て、淤泥に染まざるが如くと喩へたのである。而も論註下<sup>三</sup>に之を佛正覺華であると釋し、淨土に往生して佛正覺の果を取るべき花と解せられた。されば茲に一心を佛因と言はれたと同じ意味となる。

然流轉愚夫輪廻群生……世間極難信法

【科文】 二舉難信却嘆。

【句釋】 然流轉愚夫輪廻群生。此の二句は上<sup>三</sup>欲生心釋の下に流轉輪廻、凡夫、曠劫多生、群生とあるを約す。恐らく信心無起、真心無起の反面に、如來の大悲廻向心から、諸有の衆生を招喚したまふことを顯はせるものと見られる。是以經言。大經流通の文。亦說一切等。稱讚淨土經の文である。一代諸經の信よりも弘願の信樂の難きは、それが希有であり最勝であるからだ。然るに二尊の大悲に緣ればこそ、一心の佛因の獲

られるといふは、誠に尊い有難いことだと、難信を擧げて却つて嘆ぜられたのである。

### 三 總結四法の趣旨

誠知大聖世尊……爲大悲宗致<sup>二</sup>

【科文】 三總結教行信證<sup>二</sup>。初顯能化本懷<sup>二</sup>。初釋尊本懷。已下大科第三で、最後に總結して眞實之利の教を嘆ぜられる中、初に能化の本懷を顯はす。

【句釋】 誠知大聖世尊。釋尊を指す。大經序分に阿難が唯然、大聖我心念言<sup>三</sup>等と釋尊を呼びかけ今日世尊等と怪み問へる所で出世の本意を現された。故に此に大聖世尊といふ。出興於世大事因緣。此娑婆世界に出現せられた一大事の因緣といふこと。

大事因緣の語は法華方便品に出づ。因緣とは所以といふ意味である。顯悲願眞利爲如來直說。悲願は大經所說の彌陀大悲の誓願。それを眞利と名づくるは惠以眞實之利の語に據る。即ち他の一代經を方便の利として、大經所說の本願一乘のみを眞實の利とせるもの。流通に之を無上大利と説き、小經に之を我見是利と説く。直説とは他の聖弟子等の説でなく、佛陀の親りの説といふ意にも解せられぬことはないけれど、愚禿鈔

下<sup>二</sup>の御釋意に依れば、方便を捨て、直に眞實無上道を説きたまへることであると思はれる。示<sup>一</sup>凡<sup>一</sup>夫<sup>一</sup>即<sup>一</sup>生<sup>一</sup>。法事讚下<sup>一</sup>の致<sup>一</sup>使<sup>一</sup>凡<sup>一</sup>夫<sup>一</sup>念<sup>一</sup>即<sup>一</sup>生<sup>一</sup>の語に據る。願成就の即得往生の意である。一多證文<sup>一</sup>已下に釋あり、即生を現益と當益とに通ぜしめる祖意である。爲<sup>一</sup>大<sup>一</sup>悲<sup>一</sup>宗<sup>一</sup>致<sup>一</sup>。宗致は終極の本意といふ意味である。

因<sup>一</sup>茲<sup>一</sup>闡<sup>一</sup>諸<sup>一</sup>佛<sup>一</sup>教<sup>一</sup>意<sup>一</sup>……不可思議願

【科文】 二諸佛正意。上は大經能説の釋迦について出世本懷を顯はし、已下其釋迦の本懷に因順して、三世諸佛の教意を窺ふ一段である。

【句釋】 因<sup>一</sup>茲<sup>一</sup>。諸<sup>一</sup>佛<sup>一</sup>教<sup>一</sup>意<sup>一</sup>等。釋尊の本懷已に悲願の眞利にありとすれば、三世の諸佛の出世の正本意は、彌陀不可思議の願を説かんが爲に外ならずと示された。正本意の正の字は、華嚴法華等を簡ぶ。華嚴や法華に出世本意を説く文があつても、それは正本意でない。已今當の諸佛の出世の正本意は此の彌陀の本願を説くにありと知らしめたのである。

【論攷】 問 何が故ぞ釋尊の本懷の外に、諸佛の本懷を説くか。

答 眞實教は絶對的であり、唯一無二でなくてはならない。若も釋迦一佛のみの本懷であつて、他の諸佛の本懷でないとしたら、それは完全な眞實教ではない。されば法華經にも五佛開顯あり、十方の諸佛・過去・現在・未來の諸佛・今日の釋迦佛悉く法華を説くを本懷とするといふ。今宗祖は大經こそ三世諸佛の正本意であると示された。これは大經序分の如來以無蓋大悲等とある如來の言を、一多證文<sup>一</sup>に釋して、如來トマウスハ諸佛ヲマウスナリとある。是れ三世諸佛に通ずることを顯はす。それはどこから見込むかといふに、其前に去來現佛、佛佛相念等と説いてあるので、三世諸佛に通ずること、明かである。されば眞宗に於ける眞實教とは、單に釋尊の説教といふ歴史的事實にのみ據れるものでないことが知られる。

常沒凡夫人……速證大涅槃矣

【科文】 二結<sup>一</sup>所<sup>一</sup>化<sup>一</sup>得<sup>一</sup>益<sup>一</sup>。上は能化の本懷、今は所化の得益である。この本懷と得益との満足せるところに、他力眞宗の教行信證があると、一部を結ばれた。

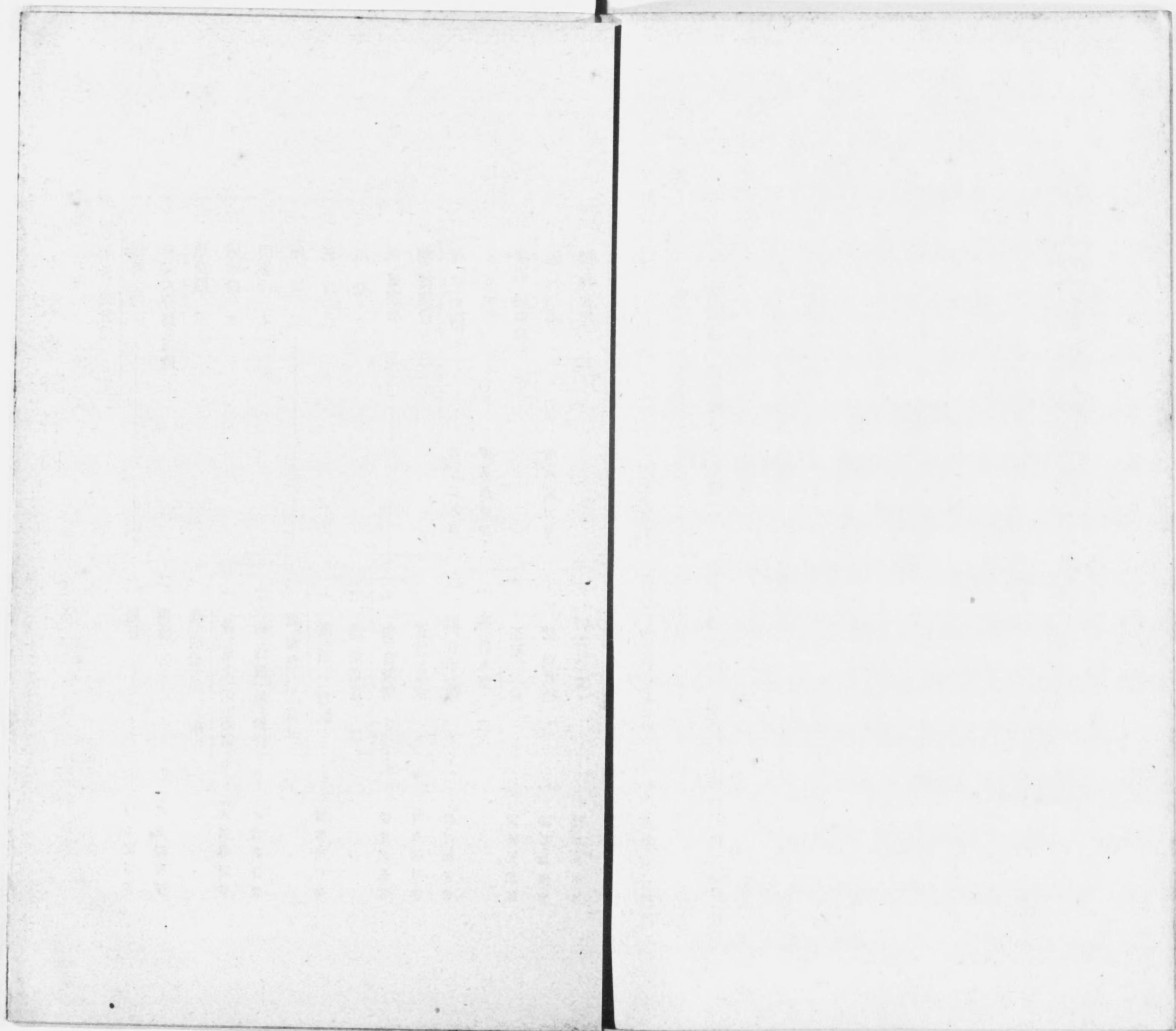
【句釋】 常<sup>一</sup>沒<sup>一</sup>凡<sup>一</sup>夫<sup>一</sup>人<sup>一</sup>。所<sup>一</sup>化<sup>一</sup>の<sup>一</sup>機<sup>一</sup>を<sup>一</sup>舉<sup>一</sup>ぐ。緣<sup>一</sup>願<sup>一</sup>力<sup>一</sup>廻<sup>一</sup>向<sup>一</sup>。上の行章に本願力廻向<sup>一</sup>有二種相<sup>一</sup>云<sup>一</sup>と出づ、それを茲に結びて、常沒の凡夫が往生の因たる行も信も、また其證果も悉く願力の廻向に緣つて獲得することを顯はす。聞<sup>一</sup>眞<sup>一</sup>實<sup>一</sup>功<sup>一</sup>徳<sup>一</sup>。眞實功德とは淨

土論に眞實功德相とあり、宗祖は誓願ノ尊號ナリと解せられ、名號のことである。されば往相の大行たる南無阿彌陀佛の名號を聞信するが、聞眞實功德である。獲無上信心。上に引ける般舟讚に發起我等無上信心とあり、最高價値の他力信心のこと。則得大慶喜獲不退轉地。得大慶喜心は上の信章に出づ。不退轉地は上の證章に出せる正定聚のこと。不令斷煩惱速證大涅槃矣。涅槃の證果を以て最後を結嘆せられた。

この結嘆五言八句は其文相を前段の諸章から取つて造語し、其文意を願成就に採つて安心の肝要を顯はし、而も教行信證の四法を其綱領とせる所に、總結として巧妙極まれる提撕である。即ち前の釋迦諸佛の本懷は眞實教であり、十七願の意である。常没凡夫人は成就の諸有衆生に當り、上の流轉愚夫輪廻群生を承く。次に縁願力廻向は、成就の至心廻向に當り、願力廻向の義は上來略本の全面に現はる。聞眞實功德は成就の聞其名號で、上の信樂釋の下に眞實功德難値とあり、四法の中の行に當る。獲無上信心は、成就の信心歡喜乃至一念であり、語を上一般舟讚に取り、四法の中の信である。則得大慶喜心獲不退轉地は、成就の即得往生住不退轉であり、上の諸章に其語出づ。次に不令斷煩惱等は、成就て言へば即得往生の餘意であり、其語は上の證章に證大涅槃之願と出づ、而してこれが四法の中の證であることは言ふまでもない。それゆゑ略本一部は要するに此の結嘆八句四十字に盡されてゐる。

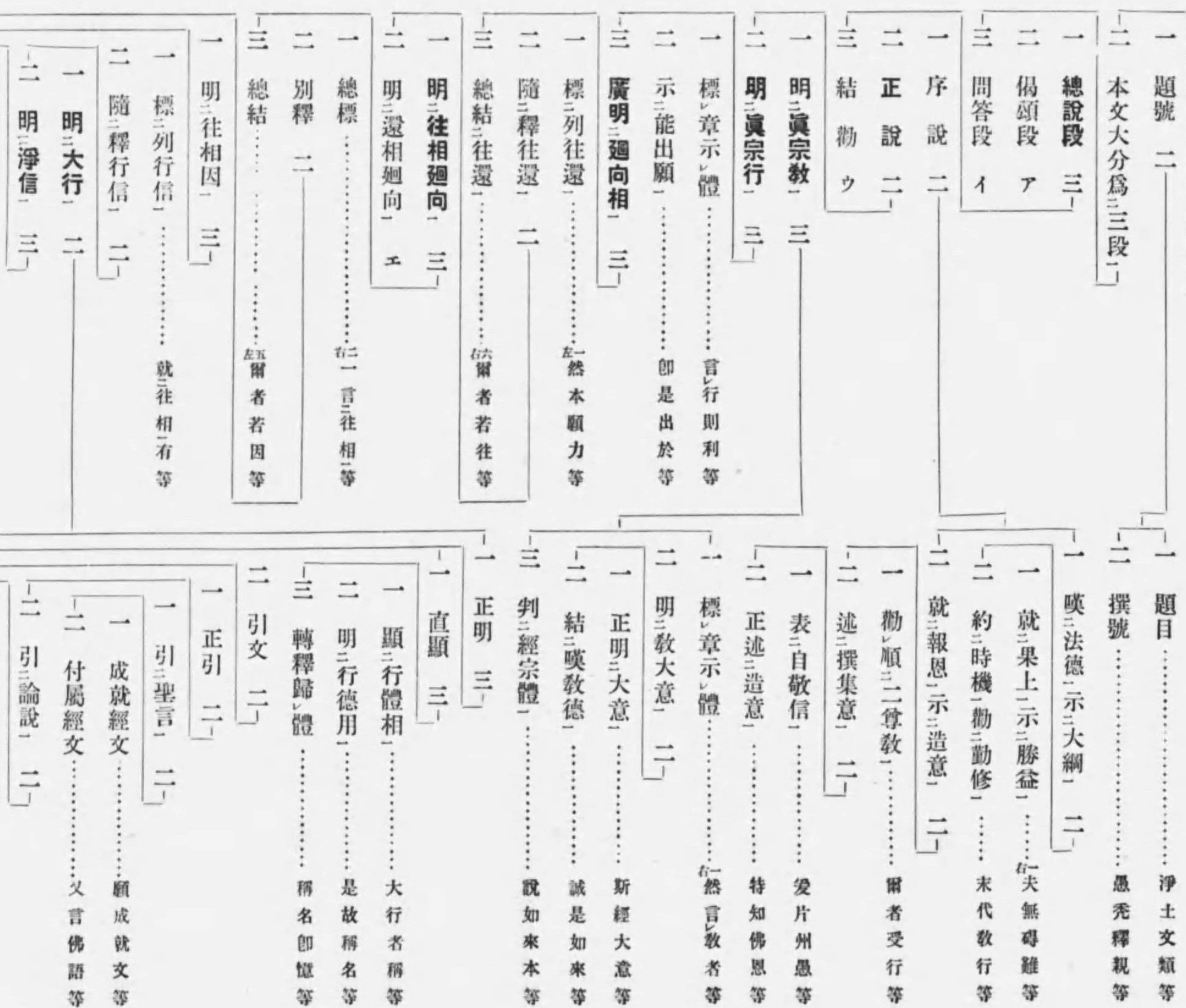
以上淨土文類聚鈔一部を魔事なく講じ了れること、冥加の程有難き仕合せに存ずる次第である。

## 淨土文類聚鈔述義 畢



# 淨土文類聚鈔科圖

將釋本鈔先分爲二



明往相因 三

一 標列行信 就往相有等

二 隨釋行信 二

一 明大行 二

二 明淨信 三

一 標章示體 言淨信者等

二 示能出願 即是出於等

三 正明淨信 二

一 料簡難易 二

一 就機相示難由 然薄地凡等

二 明由佛力易獲 四

二 結嘆 誠是除疑等

三 結簡 爾者若行等

二 明往相果 三

一 標章示體 信言證者則等

二 示能出願 即是出於等

三 正明證果 三

二 明還相迴向 三

一 標章示體 五言還相等

二 示能出願 即是出於等

三 正明還相 二

一 引文 願成就文等

二 結釋 聖言明知等

ウ 三 結勸 三

一 明教興所由 二

一 示大聖素懷 二

一 顯教興正為 於是淨土等

二 念聖權素懷 情思彼靜等

二 明傳統弘化 依之論主等

二 對時衆勸誠 二

一 嘆益勸信 二

二 舉難誠疑 二

三 慶嘆述造意

ア 二 偈頌段 三

一 述造偈意 二

二 正列讚偈 二

三 示偈句數 六十行一等

イ 三 問答段 三

一 正問答一異 三

二 結歸一心佛因 才

三 總結教行信證 力

會經論三一 二

正引 二

一 引聖言 二

一 成就經文 願成就文等

二 付屬經文 又言佛語等

二 引論說 二

一 十住論文 龍樹菩薩等

二 淨土論文 天親菩薩等

二 結釋 聖言論說等

三 結嘆 誠是選擇等

二 追釋 二

一 釋付屬一念 經言乃至等

二 釋成就一念 復乃至一等

一 正示護信由 乃由如來等

二 示信心法德 是心不顯等

三 結歎難信 信知無上等

四 示獲信益 二

一 正示 獲真實淨等

二 引證 二

一 大經文 得大慶喜等

二 如來會文 又經言是等

一 直顯 即是清淨等

二 引文 三

一 住正定聚文 無上涅槃等

二 必至滅度文 又言但因等

三 橫超昇道文 又言必得等

三 結釋 二

一 結住正定聚 聖言明知等

二 結必至滅度 住正定聚故

一 寄喻勸 今庶道俗等

二 約機勸 心昏識寡等

一 示難勸 噫弘誓強等

二 誠疑慮 若也此廻等

二 慶所獲 慶哉愚禿等

二 結撰集意 嘆所聞慶等

二 引註論文 因茲披閱等

二 述意標題 信知佛恩等

二 標所讚 西方不可等

二 正列讚偈 二

一 依經讚 法藏菩薩等

二 依釋讚 印度四天等

一 依釋讚 (細科畧之)

二 標意 一私以字訓等

二 微釋 二

二 會經論 二

二 結歸一心佛因 才  
三 總結教行信證 力

會經論三一 二

一 問……………右二問念佛往等

二 答 三

一 略答……………答愚鈍衆等

二 廣說 二

三 結答……………左一五三心即一等

一 標列三心……………言三心者等

二 正釋 二

一 以字訓會 三

二 約廻向會 二

一 別釋三心 二

一 標……………右二復言三心等

二 釋 三

一 釋至心 六

二 釋信樂 六

三 釋欲生 六

二 會三爲 一 三

一 直釋……………右四三心皆是等

二 引證……………依之披師等

三 釋成 二

一 釋清淨願心……………是知能生等

二 釋一心正念 二

一 釋正念……………爾者一心等

二 廣釋一心……………一心者即等

二 因會大觀三心 二

一 問……………左一五又問大經等

二 答 三

三 因會小經執持 二

一 問……………右一六又問已前等

二 答 二

一 引文答釋……………答經言執等

二 結勸歸仰……………然則執持等

才 二 結歸一心佛因 三

一 明一心爲能入……………右一六論家宗師等

二 顯獲信因緣 二

三 舉難信却嘆……………然流轉愚等

力 三 總結教行信證 二

一 顯能化本懷 二

二 結所化得益

標意……………左一私以字訓二等

二 微釋 二

一 出字訓……………其意何者等

二 正會釋……………爾者至心等

三 結三字訓釋……………字訓如斯等

一 出體……………一者至心等

二 所由……………然十方衆等

三 因行……………是以如來等

四 廻向……………如來以清等

五 引證……………經曰不生等

六 結釋……………聖言明知等

一 出體……………右二者信樂等

二 所由……………然具縛群等

三 因行……………何以故正等

四 廻向……………如來以清等

五 引證……………本願成就等

六 結釋……………聖言明知等

一 出體……………左一三者欲生等

二 所由……………然流轉輪等

三 因行……………是以如來等

四 廻向……………故如來以等

五 引證……………本願成就等

六 結釋……………聖言明知等

一 直答……………答兩經三等

二 釋由 二

一 引文 三

一 至誠心釋……………以何得知等

二 深心釋 二

一 疏文……………就人就行等

二 禮讚……………又云深心等

三 廻願心釋……………廻向發願等

二 私釋……………明知一心等

三 結答……………向問中答等

一 引文 二

一 一定善義……………今披師釋等

二 般舟讚……………又言敬白等

二 正嘆獲佛因……………明知緣二等

一 釋尊本懷……………右一七誠知大聖等

二 諸佛正意……………因茲窺諸等



383  
335

昭和十三年七月五日 印刷  
昭和十三年七月十日 發行

非賣品

著者 大須賀秀道

發行者 栗田惠成  
京都市下京區烏丸通七條上ル 大谷派宗務所教學課內

發行所 安居室務所  
京都市上京區小山上總町大谷大學內

印刷者 西村七兵衛  
印刷所 法藏館印刷部  
京都市下京區正面通烏丸東入  
廿人講町二十番地

終